
WANTED !

灰月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WANTED！

【Nコード】

N1919D

【作者名】

灰月

【あらすじ】

政治家の息子をはじめ、様々な、お坊ちやま、お嬢様が通う高校、聖欄学園。この物語の主人公、神風楓は『超一流学園の不良生徒』のレッテルを張られて以来、不良学生としての毎日を送っていた。面白可笑しい学園生活を送りたい。そんな不良学生、神風楓に集まる人達と、楓が、学園を巻きこんで繰り広げる物語。

プロローグ前編

ホーホケキヨ。

ウグイスの優雅な鳴き声。そして、ひらりひらりと舞い散る桜の花びらが、川の水面に浮かび上がる。

そう、この閑静な住宅街にもようやく春が訪れたのだ。

暖かい陽光の下、流れる川はキラキラと光り、花は悠々と生い茂る。道行く人々は立ち止まり、川を眺めては花を眺め、花を眺めては川を眺めて心を和ませる。

そして夜は電灯にライトアップされた川と桜が、何とも口では言い表せないような幻想空間を演出している。

『年金！ 年金！ 消えた年金記録と彼女との思い出！』

そんな閑静な住宅街に対し、喧嘩を売るかのような騒がしい音楽が、聞こえてきました。

音が聞こえてくる方には……一軒家があります。二階の窓から少し中を覗いてみましょう。

『ペリー！ もう一度だけ来航してくれー！ そして俺達に年金をおおー！』

「うーん……素晴らしい曲だ」

二階の窓の向こうにいた男は、ベッドの上で足を伸ばしながら座っていた。そしてこの騒がしい上、意味の分からない音楽を聞きながら阿保な事を口走る。

少しだけ顔を動かし、男の首から上を見える。

赤色がかかった短めの髪、そしてとても綺麗で大人びている顔をしてした。

『メタルキリギリスな俺達はああー！！！！ 今日もファイティン
グキリギリスウウー！！！！』

「何よこの曲はー！！！！」

おっと、部屋に誰かが入ってきたみたいだ。

私はここらへんで去るとしよう。

「ん？」

朝の風景を見ようと何と無く窓の方を見る。全開の窓の淵にはなんと、一羽のカラスがいた。

黒いカラスはまるで日食時の月みたいに、俺の視界から陽光を排除する。

そしてカラスはカアと鳴いた後、ドラ江もんのような勢いでパタパタと飛び立っていった。

しかし新学期の朝からカラスなんて……不吉だ……。背筋がゾク

ゾクしてくる……。

「楓ー！ 聞こえてんのー！？ このやかましい音楽を止めなさいよ！」

そもそもカラスってどうしてあんなに黒いんだろう……。

墨汁を全身にぶちまけているとか？ それとも墨汁風呂に一日三時間以上は浸かっているとか？ それとも墨汁エキスの入ったカプセルを……。

「楓エエエー！！！」

「ワーツ！！！」

ピッ

俺はベッドから飛び上がり、そしてリモコンの停止ボタンを押し音楽を止めた。

「聞こえてたんでしょ？」

「はい……。聞こえてました……」

彼女の顔は笑っていたが、それが逆に恐怖心を駆り立てる。

「しっかし、あんたもよく分からない曲を聞くわよね」

「よく分からない曲じゃない。ファイティングギリギリスと年金問題って曲だ」

「曲名もおかしいのね」

彼女はいかにも興味が無いといった表情と仕種で俺に言う。そんな態度を取られたんじゃ、さすがの俺も引けなかった。

「なら、ヘラクレスオオカブトは天下り常習犯ってのはどうだ？」

「それも同じよ！曲名からして有り得ないわ！」

「へっ！ならもう聞くな！」

「聞かないわ。っていうか、起きてるんだったらさっさと用意してよ。学校に遅刻しちゃうじゃない」

「嘘っ！？　せっかく今日は早起したのにつ！」

「自力で起きたって言うても、こんなにのんびりしてたらそうなるわよね」

ですよね。

「ほら、さっさと準備して。学校に行くわよ。二年生になった早々遅刻してたまるもんですか」

「まあ、新しいクラスは第一印象が大事だからな」

「まあねっ。今年こそ、稲瀬真琴は清楚で可憐なお嬢様みたいだねって言われてみせるから」

「はいはい。まっ、適当に頑張れよな」

言って俺はベッドから下り、ハンガーに掛けてあった真っ黒の制服と、真っ白のワイシャツを取り外す。そして寝間着として来ていたユニシロのスウェットに手を掛けた。

と、俺はそこである事に気付く。

「おい、何ボーっと突っ立ってんだよ。そんなに見たいのなら、見せてやるつか？有りのままの俺を」

彼女は部屋から出ずに、じーっと俺を見続けていた。俺は見られる事によって快感を得るタイプの人間じゃないので、そんな状況を

黙って放っておく訳にはいかなかった。

まあパンティーまで脱ぐわけじゃないし、そんなに気にする事でもないんだけど。

「へっ！？ そんなのみ、み、見たい訳無いじゃない！」

と、俺に言われた少女は、真っ赤な顔で俺を怒鳴り付け部屋を出ていった。

さて、紹介が遅れたが、わざわざ俺を起こすため、部屋に無断で入って来た泥棒まがいの彼女は――。

「消すわよ？」

す、すいやせん。

彼女の名前は稲瀬真琴^{いなせまこと}。長く茶色いツインテールが特徴の、可愛い女の子だ。

可愛いと言っても、当の本人はそんな自覚は無く、今まで一度も自分が可愛いと思った事は無いらしい。

俺はと言うと、小さい頃から一緒に居たからかどうなのか、あまり可愛いと意識した事は無い。

……なんてゆったりと考えてもいられないな。

俺は急いで制服に着替え、そして部屋の隅に置いてある鏡を見た。今日も自慢の赤髪はばつちりとキマッている。

それを確認した俺は、よし。と一声。部屋から出てどたばたと一階に下りていく。

階段を下りたら真っ直ぐキッチンに向かう。

そこで、買い溜めしておいたメロンパンを含む菓子パン数個。それをカバンにほうり込み、そのついでに自分の口にも菓子パンを突っ込む。

続いて、買い溜めしておいたペットボトルジュースをパン同様にカバンへとほうり込み、そうしてから紙パックジュースにストローを挿し、手に取った。

よし、行くか。

「真琴、学校に行くぞ」
「オッケーよ」

俺は玄関の扉を開け、外でチューリップを眺めながら待っていた真琴に呼び掛けた。

ちなみに今朝、真琴が俺を起こす為に俺の家に入ってこれたのに理由は理由がある。

それは真琴がピッキングの達人――。

ゴチーン！

「何故俺をいきなり殴る!？」

「いや、何と無く……楓が何か、失礼な事を考えてそんな気がしたから……」

「お前はESP保持者かよ!？」

「素直にエスパー、って言えばいいのに……ってやっぱり失礼な事を考えてたのね!？」

と。まあピッキングというのは冗談で、真琴が家に入って来れた本当の理由は、家の合い鍵を持っているからに外ならない。

何故合鍵を持っているかという事には、様々な理由が、ポケットに入れておいたイヤホンのコードみたいに絡み合っているので、今は気にしないでほしい。

ヒューー!

学校に向かって川沿いを歩く俺達に、春特有の強風が吹き付ける。今日は、進級を迎えた俺達の心境を表すかのように、透き通るような雲一つ無い青空が俺達を迎えてくれている。

そんな清々しさに誘われて、俺は一度深く深呼吸をした。

「都会の空気は汚いつ」

まあ、いくら天気がいって言うても所詮は都会って事さ。それに俺、空気のおいしさを比べられる程、空気に精通してないし。

「そっぴや真琴、時間は大丈夫なのか？」

「今は八時二十分よ」

「そつか。予鈴が八時三十五分で、高校までは走って五分だから…
…今日は余裕のよっちゃんだ」

「うん。幸先のいい進学期ね」

「よかったな真琴。いい印象を受けそうだぞ」

「この勢いで今年こそ清楚で可憐な学園生活を送るわよー！」

真琴は拳を握りながら闘志を漲らせていて、何故か俺には真琴の瞳が燃えているように見えた。

「真琴、これで今年こそは玉の輿に乗れるかもな」

「そ、そうね！」

「まあ、お前は乗ろうと思えばいつでも乗れるんだったよな」

「ま、まあね……」

「学園プリンスを、まさかの一ヶ月でポイツ。だからな。モテる女の考える事はわかんねーや」

「ポイツって……。別に捨てた訳じゃ……」

「お前、本当に玉の輿に乗る気あんのかつ？」

俺は人差し指をピツと指し、言い放った。

「も、もちろんあるわよ……」

「だったらもつと反省しろ」

「うう……」

ストレートに指摘された真琴は、珍しくしおらしい姿を見せた。ちよつと言い過ぎただろうか……。いや、こういう奴にはガツンと一発言ってやらなきゃいけないんだ。

真琴を玉の輿に乗せる。俺はそう心に誓って歩き出す。

目指すは俺達の通う高校。私立、聖蘭学園だ。

ざわざわ

学校に入ってまず目についたのが、掲示板の周りに集まる人ばかり。みんなそれぞれに新しいクラスを確認しているのだろう。

そしてそこでは、再び同じクラスになった喜びを分かち合う人々、クラスが別れてしまった悲しみを分かち合う人々、クラスに興味の無い人々。様々な人間模様が描き出されていた。

俺と真琴も自分達の新しいクラスを確認すべく、バーゲンセール時のおばちゃんみたくその集団に飛び込んだ。

「その商品は私の物よー！！！」

……………。

「私が取った商品よー！！！」

「やめんかいつ！！！」

ゴチーン！

ツッコミなのに、冗談じゃ済まないくらい痛いんだよね、このげんこつ……。

「何でバーゲンセールのおばちゃんの真似してるのよ！？」

「すまん。やってみたかったんだ」

と、そこで俺達は周りの目が冷たい事に気付いた。

「あの二人が例の問題児ね……ヒソヒソ……」

「噂では、ここら周辺を二人でブイブイいわせているとか……ヒソヒソ……」

「しかもあの女、去年神宮司先輩を一ヶ月でフツたらしいわよ……ヒソヒソ……」

俺は辺りをキョロキョロと見渡す。

そして音源を突き止めた。

「そこっ！ヒソヒソ話を止めなさいっ！」

「キヤー。神風楓が何か言ってきたんですけどー」

「貞操の危機なんですけどー」

「つーか髪の毛赤いんですけどー」

「マジウケるんですけどー」

お前ら、殴っていい？

「あああ……。つついッコミをしちゃったわ……」

血管をピクピクいわせている俺の隣で、真琴は絶望感漂う顔をしていた。

玉の輿に乗りたいた真琴にとって、今のツッコミは明らかなイメー
ジダウンだろう。

よし、真琴の為に一肌脱ぐか。

「神風楓のストリップショー！ はーじまーるよー！」

俺は一肌ではなく、服を脱ぐことにした。が、大衆の視線はすぐさま俺達から掲示板へと向けられる。

「そうか、みんな俺のストリップショーには興味がないんだな。この俺の筋肉質で筋肉痛で肉離れの肉体に興味がない、と。そう言いたいんだな。しかし俺は脱ぐぞー！」

「キヤー！変態ー！」

「うわあー！本当に脱いでくぞー！」

フハハハハ。叫べ、喚け。絶望に打ちひしがれるがいい。

「仕方ないから今回は無料でいいぜ」

「誰も元から払う気なんて無いわよ！！！」

ゴチーン

「イタタタ……。殴るこたないだろ」

「こんな場所で脱ぐこたないでしょ！？」

「それはごもつともなんだが、みんなお前にビビッて逃げたぞ」

先程まで掲示板の前にいた人達はみーんな居なくなってしまった。

「違うわよ！あんたが脱ぐから居なくなつたのよ！」

「あつ……そっか」

ピュウー

今が秋なら、枯れ落ちた木の葉が風に吹かれて俺達の前を通過しただろう。

さて、馬鹿やってないで、いい加減自分のクラスを確認しないといけない。

もしかしたら俺の名前が無いという可能性も危惧される。言葉無き退学勧告。というやつだ。

俺の苗字は神風だから、上の方を探していれば……………

………あつた、神風楓。三組だ。

「…………グスン」

俺の隣で、真琴がグスンと泣いている。

「どうした真琴。もしかして名前が無かったのか？ 安心しろ。親父の全財産を搾り取ってでもこの高校に居させてやるから」

気休めを言うものの、真琴は落ち込んだままだった。やはり気休めは所詮気休めなのだろうか。

俺は手を額に当てながら嘆く彼女の顔を覗き込んだ。

「どうして小中高と全部同じクラスなのよ……。今年こそはあなたから離れられると思ったのに……………」

「あ、だから泣いてるのか。まあ、名前があっただけいいじゃん」

掲示板から真琴の名前を探すと、俺と同じ二年三組の欄に書いてあつた。

「そんなのあるに決まってんでしょ！？ どういう心配をしてんのよ！？」

「いや、言葉無き退学の心配をだな」

「そんなの有るわけないでしょ！？」

いや、校長からの遠回しな退学勧告の可能性が……。

「ある訳ねえよな」

「普通に考えたらそうでしょ？」

「だな。まあ、さつさと教室に行くぞ」

「はあ……やっぱ行くのね……」

無事に名前が書いてあった俺達は、安心して二年三組の教室へと向かった。

ガラガラ

教室に入ると俺達以外全員が席についていた。一言も喋らず、ただ黒板を見つめ続けている。

俺は教室に続いて黒板を見た。するとそこには、席替えをするまでは来た人から順に好きな席を選んでください、と書いてあった。

それだったら普通、真ん中の一番前が余ると思う。ところが、空いていた席を見てビックリ。なんと左から三列目と二列目、それぞれ一番後ろの席が余っている。

そんな後ろの席が嫌なのだろうか。そんな疑問を抱きながら、俺は三列目、真琴は二列目に座った。

「席替えまでの辛抱ね」

「辛抱とか言わないでよ、真琴ちゃん」

「わ、分かったわよ。私が……悪かったからっ！ちよっ……抱き着かないでよっ！」

ガラガラ

「おはようザマス」

と、俺がペットとボディースキンシップをとっていた時に、担任らしき人物がタイミング悪く教室に入ってきた。

その人物は、コツコツと足音をたてながら一歩一歩歩き、そして教壇の前に立つ。

「私が担任の神流静流かなしずるザマス」

ガン！

俺と真琴は、顔面を机にぶつけてしまった。

「ザマスって何だよ……」

「私、鼻血が出そう……」

俺達の前に現れた担任は、香水の臭いがキツそうなおばさんだった。

ボンキュッボンの美人教師を所望していた俺にとって、狐のようなつり目の、眼鏡おばさんが担任になったという事は非常に残念で仕方なかった。

しかしそれ以上に……語尾にザマスって……。

「えー、皆さんはいずれ日本を担う存在であって………つまり一流な………このクラスで出会った仲間を大切にしてほしい」

「という事ザマス」

おばさんは早速、下らない話を延々と喋り続ける。
話の内容は蛇足だらけで、もう俺の脳内の蛇は麒麟にまで成長していた。

「ですから私は……」

「話長いつてのー！！！！」

しーん

面白い所が語尾しかなかった、あまりにも退屈な話に俺はもう限界だった。

この沈黙と、担任から向けられた冷たい視線が痛いのは否めないが……。

「なるほど……ザマス」

そこにもザマスが付くのかよ！？

「問題児の神風さんは私のクラスになったザマスか」

「そんなに問題児って言われるような事はしてないんだけど……」

「そうザマスか？ 去年の暴動事件、あれは……」

「……先生」

真琴が担任の言葉を遮るように呼び掛け、じっと担任を睨み付け

ていた。

「ゴホンッ！……確かに今話すような事じゃ無いザマスね。さて、先程もおっしゃった通り、皆さんが仲良くなる為に、今から早速自己紹介をするザマス」

担任は何事も無かったかのように、さらりと言った。

「それじゃあ鮎川あゆかわさんから始めるザマス。鮎川さん、起立するザマス」

「……はい？」

窓際の一番後ろの席、真琴の左隣りの席に座る女の子が返事をする。

長くてサラサラの髪。柔らかそうな唇。思わず彼女に見取れてしまっ程、彼女は綺麗だった。

「私は何をすればいいのでしょうか……？」

「聞いてなかったザマスか？ 自己紹介をして下さいと言ったザマス」

鮎川と呼ばれた彼女は少し首を傾けて、担任に問い掛ける。しかしその仕種もまた、俺の心臓を高ぶらせた。

「……鮎川咲蘭あゆかわさくらです。よろしくお願いします……」

鮎川は自分の名前だけを言って、自分の席に腰掛けた。ちらほらと拍手の音が聞こえる。

「もう終わりザマスか……。まあいいザマス。ちなみに皆さんご存

知でしょうが、鮎川さんは理事長の娘さんザマス」

理事長の娘ねえ……。

そついや最近、理事長に会ってないな。会ったらラーメンの一杯でも……。

「……ってええええー!!!!」

「何ザマスか神風さん。うるさいザマスよ」

「いや、だって……彼女があんたの理事長の娘って……」

「何か問題でもあるザマスか？」

「何か問題ある?……って、絶対あんたも俺と同じ事を思ってるだろ」

「そ……そんな事無いザマスよ?」

そんな。まさか。信じられない。アンビリーバブルや。

「おい鮎川、それは本当なのか?その……お前が……あの理事長の娘って」

「……はい」

ノーウェイ!!!!

まさか。そんな。信じられない。アンビリーバブルや。

「その話はもうおしまいザマス、神風さん。それでは自己紹介を続けるザマス」

そうして出席番号二番の人が呼ばれた。
俺は一度頭を冷やし、冷静に考える。

鮎川が理事長の娘……。そういえば、理事長の苗字って鮎川だったような……………。

「真琴、奇跡って信じるか？」

「奇跡……。確かに奇跡としか言いようが無いわね……………」

「ああ。トンビが鷹を産んだってのはこの事だな」

真琴も鮎川が理事長の娘だという事に、俺同様、かなり驚いていたみたいだった。

「はい、それでは次ザマス。次は……………稲瀬真琴さんザマス」

「は、はいっ」

と、不意に担任に名前を呼ばれた真琴は、慌てて立ち上がった。
真琴が立ち上がると同時にクラス中がざわつき出した。

「可愛いな……………」

「可愛いわね……………」

「俺、惚れたよ……………」

そういえば去年、俺達が一年生の時もこれと同じような光景が繰り広げられていた覚えがある。

その時も今と同じ様に、その美貌のあまりクラスの視線を集めてしまった。そしてクラスの視線を一身に集めた真琴は、緊張して訳の分からない事ばかりを言ってしまう、というハプニングが去年は

起こったのだ。

「え、えっと。わ、わ、わ、私のお墓の前で……」

駄目だこいつ。お前のお墓がどうしたって話だよ。

このままだと真琴は去年の二の舞。再び訳の分からない事ばかり言って、クラスメイトに最悪な第一印象を与えてしまう。

しかし今年はちがーう!!!

実はこの俺、神風楓はこんな事もあるかと、前以てある準備をしておいたんだよね。

「真琴。その紙に書いてあるとおりに言え」

ポケットから一枚の紙を取り出し、そして言いながらスツと真琴の机上にそれを置いた。

「え、これって……」

「感謝しろよ。深夜二時までかかったんだからな」

深夜一時五十五分から始めた作業だという事は黙っておく。

「……ありがとう、楓……本当にありがとう……」

「泣くなよ真琴。俺達の仲だろ？」

「うんっ……！じゃあ読むねっ……！」

「私はムスカ大佐だ」

しーん。

「……じゃなくて、私の名前は稲瀬真琴です」

「なあ。今、私はムスカ大佐だって言わなかったか？……ヒソヒソ

……」

「私も聞こえた……ヒソヒソ……」

「もしかして、ムスカ党なのかな……ヒソヒソ……」

「あんなに可愛いのに自己紹介が痛いなんて……ヒソヒソ……」

真琴は、いつ目に涙が浮かび上がってもおかしくないくらい、プルプルと震えていた。

「私の趣味は新体操です。去年、インターハイまで出場しました……。以上です……」

真琴は声をも震わせながら、何とか自己紹介を終わらせた。そして、着席した真琴に俺は言う。

「君はラピュタ王と同じクラスにいるのだよってちゃんと覚えて。とにかく泣くな真琴、俺が悪かったから」

俺は言ってから気付く。

今の発言が完全に失言だった、という事に。

「あゝあ！？泣く？誰が？言ってみなさいよ」
「ヒィーッ！」

真琴は泣きそうだから震えていたんじゃない。
怒り。真琴を支配しているのは怒りの感情だ。

真琴の右手を恐る恐る見る。

握り締められた拳が、脳から送られる発射の合図を今か今かと待っている状態だった。

このままじゃ死ぬ。こうなったらあれを使うしか無い。

「ま、こ、と、ちゃん？」

「黙らないと消すわよ？」

「まあまあ、そんな事言わずにさ。ほら、メロンパンあげるから」

言って俺はメロンパンをさつと机の上に置いた。

普通の人はメロンパンを与えられても、何なんだよ。と思うかもしれない。

だが真琴は違う。

「わーい」

仁王面が一瞬にして、恵比寿面に変化した。

そう、何を隠そうこの真琴という少女。メロンパンが大好きなのだ。

真琴いわく、メロンパンさえあれば一生暮らせる。好きなキャラクターはメロンパンヌちゃん。

どんなに怒ろうと、どんなに嫌なことがあると、このメロンパンさえあれば全て忘れられるという、残念な脳みそを持つ……もとい、心からメロンパンを愛している少女だ。

「すまん、悪ふざけが過ぎた。お詫びとして帰りにたくさんメロンパンを買っておくから」

「うんつ。……むしゃむしゃ……ごっくん。ありがとう、楓っ！」

いえいえ、またどうぞー。

へっへっへ。メロンパンで全てが解決するんだから、なんとも扱いが簡単な女だぜ。

「神尾^{かみお}さんの次は……栗原^{くりはら}さんザマス」

お、自己紹介も力行まで進んでたのか。
次は栗原だから俺の番は……。

「先生ー！ 俺ー！ 俺ー！ 俺ー！ 俺ー！」

「ああ、忘れてたザマス」

「俺俺俺俺俺俺ー！……俺を飛ばしてるー！……！」

「うるさいザマスしつこいザマス。はい、神風さんザマス」

あのババア……。確信犯だな。

俺はおばんを睨みながら立ち上がった。

同時にクラスメートが俺を一樣にジロジロと見てくる。そんなに俺が気になるのだろうか。

こうなったら取るべき行動は一つ。

「神風楓のストリップショー！ はーじまーるよー！」

「止めるザマス！ さつさと着席するザマス！」

そうして俺は名前を呼ばただけで自己紹介が終わった。

- - - - -

「続いて……ほうせんいんあすか鳳仙院飛鳥さん、

起立するザマス」

「はい」

俺は席についてからというものの、机に右頬を擦り付け、睡眠の体勢に入っていた。

なんの変哲も無い、いたって普通な自己紹介が心地いい子守歌となり、俺はグースカピーと寝る寸前だった。

がしかし、鳳仙院とかいう、世にも珍しい名前が俺を現実世界へと引き戻した。

「鳳仙院飛鳥か……。どこかで聞いた気がするな」

「何言ってるのよ。鳳仙院飛鳥って言ったら、大財閥の一人娘じゃ

ない」

あ……。思い出した。

飛び抜けて美しい容姿を持った、超有名なグループの御曹子。そしてその行動力は人々を引き付ける、学園のカリスマ的存在。それが彼女だ。

「そっぴや昨日親父が言つてた。鳳仙院グループのお嬢さんと同じクラスになったのなら、くれぐれも失礼のないようにってさ。鳳仙院グループって、親父の会社の大株主らしい」

「へー。だったら彼女に滅多な事できないじゃない」

「親父の会社など関係ないわ！そんなのはさっさと潰れてしまえばいいんだ！ハハハハハ！ 人類なんてみーんな月に行つてしまえー！……」

「うるさいザマスよ……！」

おっと、ついつい興奮してしまった。

とにもかくにも俺は教室の廊下側一番前の席で立っている、その鳳仙院飛鳥という少女を見た。

美しい。その一言に尽きる。

噂の通り彼女は美しく、それ以上でもそれ以下でもなかった。

スラリと伸びた身長と、ふくらはぎから太腿にかけてキュッと引き締まった足。クルンと巻いてる金色の長い髪の毛。顔立ちも、非常に調っている。

そして鳳仙院飛鳥がその小さな口を開いた。

「既にみなさん私の噂はちらほらとお聞きしている筈ですわね」
「おいおい、何だよそれは」

しーん

え、俺って何か変な事言った？ クラス中がしーんとしてんだけど。

「ゴホンッ！ えー、私の名前は先程先生が申し上げました通り、鳳仙院飛鳥と申しますわ。ちなみに私、あの超巨大グループの……」
「飛鳥ー。グループはどうでもいいから、趣味を言ってくれよー」

しーん

お葬式の方がまだ賑やかなんじゃないかと。

「可哀相ですから答えて差し上げますわ。私には趣味などありません。そんな物に費やす時間などありませんわ。毎日ピアノなどの、作法を習っていますので」

それを聞いたクラス中の人が、さすがお嬢様よね。などと言っている。

俺はどうも腑に落ちなかったが……まあいい。

「ちなみに私、学級委員になるからには……」

既に学級委員になる気満々かよ。フライングにも程がある……っ
てどうして俺を見るんだよ。

「誓いますわ。神風さんと稲瀬さんのような問題児は徹底的に根絶やしにしますと！」

「さすが飛鳥様ー！」

「飛鳥様ーすてきー！」

「三岸さん、佐古木さん。静かにするザマス」

今担任に名指しされた二人以外のクラスメイト達も、飛鳥に期待の視線を向けていた。

「お二人とも、夜道を歩く時は背後にお気をつけて。自己紹介は以上ですわ」

背後か……。

「だってさ、真琴」

「何で私も問題児扱いされてるのかしら……」

真琴は溜め息をつきながら言う。

「真琴」

「何？そんな真剣な顔しちゃって」

「面白いクラスだな」

「そう……。それはよかったわね……」

- - - - -

キンコーンカーンコーン

始業式も終わり、そろそろ正午になろうかという時。

部活の無い生徒は帰宅をし、部活が有る生徒は昼食を食べ始めた
り、部室に行ったりする。

俺は部活に入っていないので当然家に帰ってもいいのだが、土曜
日など午前で授業が終わる日も、昼ご飯は真琴と一緒に食べている。

「真琴、今日はどこで食べる？」

隣の席で荷物整理をする真琴に問い掛けた。

真琴は、右手の人差し指を顎に当てて考える。

「あんと別の場所ならどこでもいいわ」

「ならトイレで食ってるやボケ」

「嫌よ！ そんな場所で食べる気になんかなれないわ！」

「なら口を慎め」

真琴はフンツとそっぽを向いた。

自己紹介でもちらつと言っていたが、真琴は新体操部に所属し、
毎日部活に明け暮れている。

インターハイ選手は毎日毎日、さぞ厳しい練習をしているのだろ
う。

と、帰宅するのだろうか、真琴の先にいる鮎川が席を立ち上がっ
てそのままドアに向かって歩き出した。

「じゃあな鮎川」
「……………」

鮎川が俺の左側を通過しようとした時、俺は彼女に挨拶をする。
挨拶をされた鮎川は不思議そうな顔で俺を見てきた。

「俺は神風楓でこいつが稲瀬真琴。これから一年よろしくな」
「よろしくね」

「神風楓さん……………ですか？」

「ん、俺がどうかしたのか？」

「いえ……………」

なら名前を復唱するなよ……………。

「私は鮎川咲蘭です……………。さくらんと呼んで下さい……………」
「断る」

「残念です……………」

鮎川はしょぼくれてしまった。が、すぐに立ち直ると。

「では咲蘭でいいです……………」

「うん、分かった。よろしくな咲蘭」

「よろしくね、咲蘭ちゃん」

「はい。では私はこれで……………」

「おう、じゃあな」

「バイバイ」

そうして咲蘭は行ってしまった。

彼女は俺の思った通り、話してみると意外と面白い人だった。

「ミジンコがペガサスを産むって、この事だったのね」

「だな。それよりどうする？ 昼飯どこで食う？」

「うーん……そうねえ……」

考えられる昼食スポットは食堂、教室、中庭の三つ。

冬ならば食堂が教室で決まりなのだが、今は春。

「それなら桜を眺めながら食べない？」

と、真琴が言ったので、俺達は中庭で食べることにした。

中庭の中心には大きい桜の木が一本、悠々と生い茂っていて、それを眺めながら食べよう。ということだ。

二人並んで教室を出た俺達はピカピカ光る廊下を歩き、大理石の階段を下りて大きなシャンデリアがある昇降口で革靴へと履き変える。

ちなみに俺達は普通の革靴だが、革靴一つにも大金を使うのが本当のお坊ちゃま、お嬢様らしい。

それも金持ちのステータスなのだろうか。

「綺麗ね」

中庭に到着するなり真琴が言った。

満開の時期は過ぎてしまったものの、桜は未だに美しく咲き誇っていて、春の代名詞は未だに俺達にその存在をアピールしている。

中庭は口の字型校舎の中心に位置し、全面に芝生が敷き詰めてあった。

池では優雅にコイが泳ぎ、鳥は歌い、学園生達は話に花を咲かせ

る。

真琴は完全に場違いだった。

「真琴、場違いだぞ」

「何よいきなり！失礼ね！」

「いや、あそこで話している人を見てみるよ」

言って俺は桜の木の下で弁当を食べている二人組のお嬢様達を指差した。

「確かに……。悔しいけど、オーラが全く違うわね……」

「だろ？」

俺が指差した人は真琴の言った通り、体から出ているオーラが違っていた。

特に左の人は美しさを極めたかのように整った顔立ちと、パーマのかかっている金髪。そして左耳の少し上に付いている髪止めがアクセントとなつて、まさに芸術とも言うべき美しさだった。

それはまるで桜の木の下に桜の木が生えているような。

それにしても美しいのはいいのだが、彼女はどこの誰なのだろう。

「あつ！ あの人どこかで見たと思つたらっ！」

「誰だ？」

真琴が何かを思い出したようだ。俺は視線をお嬢様からエセお嬢様へと移した。

「エセお嬢様って誰よ!？」

「気にするな。若さ故の過ちだ。それで……何を思い出したんだ？」

真琴はそうそう。と言つて目を大きく開かせ言つた。

「生徒会長よ生徒会長！ 学園一美しくて学園一可憐と言われてる！」

「そうか、俺も思い出したぞ。去年あの人を盗撮しようと思ったら、見つかった記憶がある」

「どうしてあんなつてそう……非常識なのよ……」

学園一美しくて可憐な生徒会長か。そうと分かればとるべき行動は一つ。

「真琴。昼ご飯を一緒にさせてもらつぞ」

「はあ!？」

「なんだその返事は。まるで俺の発言が非常識みたいな言い方だな」

「いや、だって、私達なんて相手にもされないに決まつてんでしょ!？ ファンクラブ会員だつて相手にしないような人なのよ!？」

「へえ。冷たい人なんだな」

「そうよ。氷の会長つてあだ名を付けられるくらいなんだから。私達とは住む世界が違うのよ」

そうか。しかしそんなのはやってみなくちゃ分からないさ。

「おい氷の会長さん。一緒にご飯食べましょ……フガフガ」

「この馬鹿……!!! 非常識……!!!」

うるせえうるせえ。いいから口に当てた手を離しやがれエセお嬢様め。

「よく考えるよ。もし生徒会長さんとお近づきになれば、それこそお前は玉の輿街道まっしぐらだぞ」

「そうなの？」

「ああ。それにあの人の近くにいれば、あの人が持ってそうなお嬢様術みたいなのも盗めるじゃんかよ」

その一言が決め手となって、真琴は昼食を一緒するという案に同意することとなった。

そして早速、俺達は二人組のお嬢様達が弁当を食べている場所へと近づいて行く。

「お前ら何者だ！？」

俺はただ近づいただけなのだが、二人組の片方は立ち上がり、腰に掛けていた刀を抜いた。

俺の首との距離は数ミリ程度。少しでも動いたら切れる状態だ。

「言え。何をしに来た？」

「いや、生徒会長さんを盗撮しようと思って……」

「盗撮だと！？ まさかお前、この前のっ……！」

あ、やっぱり覚えてたんだ。俺もあんたに追い掛けられた覚えがあるよ。

「花音^{かのん}。やめなさい」

と、その生徒会長さんが刀を持つ少女に言う。

彼女は躊躇っていたが、生徒会長がもう一度同じことを言つと渋々刀を仕舞った。

そして生徒会長さんはそのまま俺達を見た。美し……じゃなくて、俺達は彼女に何を言われるのだろうか。ハラハラドキドキだ。

「お名前を教えてくださいませんかしら？」

「俺は神風楓で、隣にるのが……」

「稲瀬真琴です」

生徒会長は眉一つ動かさずに、ただ俺達を物色するかのように見てくる。

なんか照れるな。

「そうでしたか。あなたたちが有名な問題児二人組でしたか」

「え！？ 俺達ってそんなに有名な！？」

「当たり前だ。神風、特にお主は去年のあの事件以来な」

花音という人の口調は何故か武士みたいだった。家が武士の家系か何かなんだろうか。

それはさておき俺達は悪名高いのか……。

「なんか照れちゃうな」

「照れてんじゃないわよ！！！！」

ゴチーン

「いつつ……。とにかく俺達は名乗ったんだから、あんたも名乗ってくれ」

「え、あなたは私の名前を知らないのですか？」

「知るかよ。俺達は初対面なんだぞ」

「貴様！ お嬢様に恥をかかせたな！ 刀の錆にしてくれる！」

「いやいや、俺は思ったことを言ったただけだ……ってうわぁ！」

気付いた時には、俺の髪の毛がハラリと舞い散っていた。

「次は首を……」

「花音、落ち着いて」

会長に花音と呼ばれた人は、刀を仕舞った。

そして会長はそのまま息を大きく吐いて、そしてまた大きく吸った。

「やめましょうか……」

へ！？

「すいません、楓さま。花音は昔っから頑固なんですよ」

「えっ……さっきと口調が違……」

時雨の口調の変化に驚いたが、真琴は俺以上に、顎が外れそうなくらい大口を開けて驚いていた。

「私は三年三組で生徒会長の綾小路時雨あやの「つじしぐれ」と申します。よろしくお願ひしますね」

いって彼女はペコリと頭を下げた。

なんだかさっきまでとは違って、とてもゆるい喋り方をする人だった。

「あの」

「どうされましたか真琴さま？」

「真琴でいいです……」

「そうですか。では真琴さんと呼びさせて頂きますね」

横で見ていた俺は、真琴がこれから聞きたい事が何と無く分かった。

「あの……その口調は……」

「ああ、これですか？　これが本当の私ですよ」

「はあ……。ならどうして……」

「お嬢様は、このトロトロした喋り方を変えようと努力なさっているのだ」

会長の代わりに、花音が言う。

でも、氷のように冷たい生徒会長よりはこっちの方がいいかもしれない。

「自己紹介も終わった事ですし。どうか座って下さい」

「そんじゃ、遠慮なく」

「え、いいんですか!？」

「いいんだよ真琴。生徒会長がそう言ってるんだからさ」

「はい、楓さまのおっしゃる通りです。ご飯は沢山の人と食べた方が美味しいんですよ」

「ほら真琴。生徒会長さんもこう言ってる事だし。さっさと座れよ」
「は、はい。失礼します!」

真琴はおどおどしながらも俺の隣に座った。

「楓さまは楓さまと呼びして宜しいのですか？」

「いや、世紀の大ピッキング犯、デーモン奈良橋と呼んでくれ」
「奈良橋って誰よ！」

ゴチーン

痛い……。ツーか生徒会長の目の前だったのにツッコむのかよ…。
…。ほんとツッコミ命なんだな。

「それでは世紀の大ピッキング犯、デーモン奈良橋さんと呼びますね」

「いや、普通に楓でいいよ」

「そうですか……。残念です……」

「残念なのか？」

「冗談ですよ」

なんだ、冗談だったのね。

それにしても、会長って変な人だな。

「それなら私の事は、プリーティーガール時雨ちゃんと呼びください」

「いや、普通に時雨でいいよ」

「そうですか、残念です……」

やっぱり変だ……。

「あ、そうでした。彼女は酒城花音さかきのんちゃんです。実は彼女、私の親衛隊長さんなんですよ」

「よろしく花音」

「よろしく願います花音さん」

「ああ」

花音はそれだけを言ってそっぽを向いてしまった。

自己紹介も一段落ついた事なので、俺は鞆の中からパンと飲み物を取り出し、炭水化物をはじめとする様々な栄養素を摂取――。

「楓さま、楓さま」

「どうした時雨」

会長は俺が手に持っている菓子パンを指差していた。

「それ、パンですよね？」

「ああ、パンだぞ。まさか見た事無いのか!？」

「はい。生まれて初めて見ました」

「マジか。じゃあこれがメロンパンって事も知らないのか？」

「そのくらいは知っていますよ。舐めないで下さいよ」

メロンパンの単語を耳にした真琴が、体をピクつと反応させた。

「袋に入ったパンって、面白いですね」

「なんなら食べてみる？」

「うん！ 食べるー!」

「誰も真琴にあげるなんて言っていないんだけ――」

しかし真琴は電光石火のような速さで俺のメロンパンを奪い、勝手に会長と半分こしてしまった。

そしてその会長に渡されたメロンパンが、今度は花音に取られてしまう。

「毒物の危険性がありますので、毒味をさせていただきます」

まあ、確かに毒が入ってる可能性はあるけどさ……。なんか気分悪いよな……。

パクリ

「むしゃむしゃ……」

花音が無言でメロンパンをむしゃむしゃ食べる。

ちなみに真琴はメロンパンを既に平らげ、花音の持っているメロンパンをよだれをダラダラ垂らしながら、じーっと見つめていた。

「美味しい……。時雨お嬢様、一口だけでは判断しかねますので、もう一口食べてみます」

「気をつけてね、花音」

パクリ

「むしゃむしゃ……うまい……」

つーか真琴が平気なんだから毒味の必要無いだろ。

「時雨お嬢様、もう一口」

「気をつけてね、花音」

そうして花音は結局、半メロンパンを全て食べてしまった。

二口目辺りから毒味が目的じゃ無くなっていたのは否めない。

「時雨お嬢様、このパンに毒は入っていませんでした」

「ありがとう花音」

盲点だらけだが、二人がそれでいいならそれでいいや。

そして、そこからは四人でお話の時間が始まった。

とりあえずお互いを何も知らない俺達は、自分の事を教え合う。

四人といっても花音は何も言わず、時折俺の鞆を覗くだけだったが……。

暫く話していると真琴が部活のために、その場から居なくなる。

「ああ。楓さまはあの神風カンパニーの社長さんの息子さんだったんですね。私もその会社は聞いた事がありますよ」

「そうか。それを聞いたら親父も喜ぶだろうな。あいつ単純だから」

「あはは。そんな言い方したらお父様が可哀相ですよ」

笑いながら言う今の時雨の姿からは、氷の会長などという姿はとても想像できなかった。

「実は私、前から楓さまの事は知ってたんです。悪い噂ばかり聞いていましたので」

「悪い噂ねえ……」

俺は普通に暮らしてるだけなんだけどね……。

「でも私、今日初めてお話しして、思いました。楓さまは噂で言われているような悪い人じゃ無い、って」

「そうか。それは嬉しいよ」

と、時雨が立ち上がった。そしてスカートに付いた草をパンパン

と払った。

「なんかずっと話しちゃいましたね。それでは、私はこれから習い事があるので」

「そっか。お嬢様も大変なんだな」

「そうなんですよ。お嬢様は大変です」

言いながら時雨は花音に呼び掛けた。

花音も立ち上がり、スカートに付いた草をパンパンと払った。

「あ、楓さま。最後に一つ」

「ん？ 最後に？」

そうして時雨は自分の顔を指差した。

「またお昼と一緒に食べましょうね」

そう言って去っていく時雨。

その後ろ姿も学園一、美しかった。

- - - - -

「楓？」

不意に世界が揺れた。

暗闇に覆われた世界がゆらゆらと揺れた。

鳩になったかのように、頭が前後にふらふらと揺れて。

そつえば今、俺は夢を見ていた。

何の夢を見ていたんだろうか。全く思い出せない。

俺は思い出すのを諦め、自分の居場所を確認した。

茜色の光に照らされた中庭。

肩の上、髪の上、芝生の上、池の水面。一仕事終えた優越感からなのかどうなのか、桜の花びらは我が物顔で、所狭しと舞い落ちていた。

「楓？ 起きたの？」

楓？

楓って誰だ……？

「……って俺ー！俺ー！俺ー！ 神風楓は俺だよー！」

時が動き始めた。

「こんな所で寝たら風邪引くわよ？」

目の前にいたのは制服姿の真琴。どうやら俺は中庭で寝てしまっていたらしい。

「私を待っててくれたの？」

「いや、そんなつもりは無かったんだけどな。ついつつとしちゃって……」

「気付いたら夕方って訳？」

「ああ。まあ、待ってたって事にしておいてくれ」

「はいはい。じゃあ、さっさと帰ろっ」

「はいよっ」

俺は立ち上がり制服のズボンをパンパンと払った。

「白……か……」

……。

……。

「見たわねー！！！」

やっぱりバレた！

「うわっ！ 馬鹿っ！ 金属バットを振り回すなよ！ ていうかどこから持ってきたんだよ！？」

「うるさい！ この変態！ 死んじゃえー！」

「俺が悪かったからー許してくれー！！！」

俺の叫び声は、少し離れた商店街にまで響き渡ったそうだった。

ブログ前編（後書き）

正当派ラブコメが書きたいな（処女作はアウトローだったから）でも普通のラブコメを書いたって面白くないな
そっぴゃ平凡を求める主人公が振り回されるラブコメが多い気がする

ならいつその事主人公がみんなを振り回しちゃえ

なら主人公は超自由人にしちゃおう

超自由人が振り回す相手は、世間知らずなお坊ちゃまや、お嬢様が
いいかな

ってなノリで思い付いたのが十一月後半（更新をサボりまくってた時ですね）。そこから色々と試行錯誤した結果こうなりました。

主人公は本当に愉快的な奴なので、面白いと思ったら遠慮なく笑って
やって下さいね

この作品で笑っていただける事が何よりも嬉しいです

ちなみに自分もパンク好きですので、決してパンクロックを冒涇したわけではありません。ネタなので、真剣に受け止めないで下さいね。

プロローグ後編

眠い。眠くない。眠い。眠くない。眠い。眠くない。眠い。眠く
ない。眠い。眠くない。眠い。眠くない。眠い。

「眠い……」

「花占いしてる場合じゃないでしょ!？」

「いや、もし眠くないが出たら、眠気が覚めるかなって……」
「んな訳無いじゃない」

朝の登校風景。

始業式が行われた昨日同様、空は青い絨毯を敷いたかのように晴
れ渡っていて、ビュービュー吹き付ける春風は花粉を運ぶ。
もちろん春風が運ぶのは花粉だけじゃない。

女子には羞恥心を。男子には幸せを運んでくれる。

まあ……ようするに、スカートがめくれてゴールドントライアン
グルのパンティーが……むふふふふふふ。

「むふふふふ」

「何笑ってんのよ……気持ち悪い……」

「安心しろ。お前のは興味ないから」

「くっ……よく分からないけど、何かム力つくわね……」

そんなやり取りを交わしながら、俺達は昇降口で上履きに履き代
え、三階にある教室へと向かう。

その際は当然学園の廊下を通るのだが、その廊下でペチャクチャ

と喋っているような生徒は一人もなく、みんながみんな、机と睨めっこ状態だった。

ガラガラ

俺達は教室の後ろ扉を開け、その中に入る。

三組も他クラス同様に、みんな机と睨めっこ状態だった。

「オハヨー。皆の美少女、稲瀬真琴ちゃんのお通りだよー！」

しーん。

「ほら。だからこうなるよって言ったんじゃない」

「あたかも私が指示したみたいに言わないでくれる!？」

俺達はクラス中の視線を集めながら、とりあえず自分の席に鞆を置く。

それと同時に飛鳥が立ち上がり、俺達の下に近付いて来た。

「ごきげんよう楓さん、真琴さん」

「おう。おはよう飛鳥」

「おはよう」

真琴は不機嫌そうに挨拶をした。

「で、何の用だ？」

「楓さん。先日生徒会長とお昼ご飯を食べたそうですね」
「ん、ああ。一緒に食べたよ」

飛鳥は敵を見るような目で。なめ回すかのように俺を見つめてくる。

そんなに見つめられたら……。

「ヘックシヨイ!!!」

「キヤー」

くしゃみが出ちゃうじゃんかよ。

「汚いつ!!!」

「すまん。つつい」

「つつい、じゃありませんわ!」

「いや、だって。そんなに見つめてくる飛鳥が悪いんだぞ」
「もういいですわ!」

唾をかけられた飛鳥は、プンプンと怒りながら自分の席へと戻って行く。

ガラガラ

「みなさんおはようございますザマス」

そして飛鳥が席につくと同時に、担任が教室に入ってきた。

去年の担任とは打って変わって全く面白くない担任。

担任と呼ぶのもアレなので、ザマス斉藤と名付ける事にした。

「はぁ……………」

この前までとは違うクラスメイト。違う担任。違う教室。

今日は先日と同じ空模様。空は澄み渡り、ポカポカと暖かい陽光が教室内に降り注ぐ。

しかし俺はそんな空模様とは反対に、今日から再び詰まらない授業を延々と聞かされる日々が始まるのかと思うと、とても気が重くなるのだった。

- - - - -

キンコンカンコン

「さあさ。委員会を決めるザマスよ」

六時間目はホームルーム。進級以来初めてのホームルームは委員会を決めるとの事だ。ザマス斉藤が黒板に委員会名を書き連ねていく。

学級委員会、風紀委員会、保険委員会などなど。

「真琴は何にするんだ？」

「私？ 私は何にしようかな……。楓は何にするの？」

「ん、そうだな……………」

など考える振りをしたけれど、実は既にやりたい委員会は決ま

ってるんだよね。

俺は行事だけじゃなくて、委員会活動にも全力投球だ。

「はい、それではまず学級委員会から決めるザマス。立候補をする人は手を上げるザマス」

「はい」

「はい」

手を上げたのは女子一人、飛鳥と男子一人、男子K。

学級委員会の定員は男女一名づつなので、学級委員会は飛鳥と男子Kの二人で決定だ。

男子Kイコール俺。

「いやあああああ！！！！」

「や、やめろおおお！！！！」

「誰か他に立候補する男子はいないのおおお！！！！」

「もうこの学校はおしまいだあああ！！！！」

「退避ー！！！！ 退避ー！！！！」

「キャー！！！！！！」

人々は叫び、喚き、絶望にうちひしがれる。

声は枯れ、頬は垂れ下がり。

もはや彼らは人としての形を成していなかった。

いったいどれだけの間、叫んだのだろう。

いったいどれだけの間、涙を流したのだろう。

一週？

一月？

一年？

時間の感覚はすでに無い。今、自分が泣いているのかさえも、そしてここがどこかも……………やめやめ。何言ってるんだ俺は。

結局他の男子が立候補し、俺は多数決でその男に負けてしまった。

その男子のあだ名は、人柱となった。

「よくやったな人柱」

「人柱君は私達のヒーローよ」

「じーんちゅう！　じーんちゅう！」

ついに人柱コールまで巻き起こる始末。
しかし俺はめげなかった。

「次は風紀委員会ザマス」

「はーいはーい！　俺がやりまーす！」

「いやあああああ！……！」

「や、やめろおお！……！」

「誰か他に立候補する男子はいないのぉお！……！」

「もうこの学校はおしまいだあああ！……！」

「退避！……！　退避！……！」

「キャー……！！！」

「おい人柱！　お前風紀委員もやれ！」

「そつよそつよ！」

「じーんちゅうー！　やれー！」

そんな事がホームルームの間ずっと続いて……。

「結局図書委員会かよ……」

「学園の政治には関われないわね」

「体育委員のお前に言われたくないわボケェ！……！」

「分かったから、八つ当たりは止めてよね」

「ぐう……」

こうなったらいつその事、本の表紙を入れ換えて、入れ換えてほしくなかったら俺を学級委員にしろ。とか言ってみるか。

小さいなあ……。

しかし不幸中の幸と言うべきか。もう一人の図書委員、言わばこれから一年間ペアとなる人物が……。

「楓さんですか……」

何を考えているのかよく分からない、鮎川咲蘭が相手になった。

「これから一年間よろしくな」

「はい……」

そうして俺は、期待と不安に胸を膨らませながら、放課後の一斉委員会へ臨むのであった。

――

「以上、第一回図書委員会を終わります」

委員長が言うなり、図書室からぞろぞろと人が退室していく。彼らはこれから塾や習い事があるのだろうか、やけに早足だ。

図書室に残ったのは俺と咲蘭、そして委員長。

その委員長も、ノートに今日の話し合いの結果を書き込み終わると、スッと立ち上がった。

「それでは神風さん、鮎川さん。申し訳ありませんが今回は頼みます。それでは私は失礼します」

そう言って委員長も退室していく。

背筋がぴんと伸びた歩き方もとても綺麗で、美人秘書を思わせるその容姿。

言動一つ一つから、いい教育を受けてきたことが伺える。

俺達二人の担当は先の話し合いの結果、火の放課後と木の昼休みとなった。

その時はいくら図書室に人が来なかつと図書室に居て、本の貸し出しや返却の手続きをしなくてはいけない。なんとも面倒臭い仕事だ。

そして今日は火曜日の放課後。初仕事だ。

以上、咲蘭からの報告でした。

「ふあゝあゝ。よく寝たゝ」
「……」

あくびをする俺。対照的に無表情の咲蘭。

「神風さん……私は帰ってもいいですか？」

「え、駄目だろ」

「……神風さんは睡眠をとったから、一人でも大丈夫です……」

「ちよつと待て。俺は寝ていたわけじゃない。魔王と戦っていたんだ」

「……そういうのを何て言うか知ってますか？……夢を見ていたって言うんです」

「確かに、言っちゃえばそうだ。だがな、俺は本当に戦ってたんだぞ」

「勝ったんですか？」

「ああ。メロンパンあげたら配下になった」

口から吐き出される炎は全てを灰燼と化し、一度歩けば大地が揺れる。全てを掻き消す獅子の咆哮。この世に絶望をもたらす暗黒の王。

それはマントをつけた真琴だった。

世界制服よりメロンパンを優先させる生物なんてあいつくらいしか居ないからな。

「帰るといふのは冗談なので気にしないで下さい……」

「知ってるよ」

「そうでしたか……。それでは私は本を読んでいるので……」

咲蘭は、寝てたんだからそのくらいはしろよな。といった意味も込めたんだろうか、軽く笑みを浮かべ言った。

俺は受付のカウンターにある椅子に座る。少し偉くなった気分だ。

と、早速女子学園生が本を持って入ってきた。

「すいません、本を返しに来たんですけど」

「フハハハハ！ 俺が図書委員だ！」

「あの、この本返却期限が過ぎちゃったんですけど……」

「いや、そんな事にすんな。いつその事その本やるよ」

「え、貰ってもいいんですか？」

「ああ、俺は図書委員だからな。この部屋の本は全て俺の物だ」

「そうなんですか！？ それじゃあ貰っていきますね！」

「おう！ また来いよ！」

赤のスカーフが制服に付いていたので、彼女は二年生なのだろう。

「一日一善。今日もいい事……」

「今すぐ彼女の所に行ってください……」

「は、は、はい……分かりました……」

鬼だ般若だ。

無表情以上に怖い表情は、他に無いと思った。

俺はその女子生徒を追い掛け、本を返却してもらった。

どうやら彼女は本気にしていたらしく、本を返却してくれと言うと、非常に残念そうな表情を浮かべていた。

「私がここをやりますから、神風さんは本を置いてきて下さい……」

「はい」

どうせ俺は邪魔者ですよーだ。

そんな微かな抵抗も虚しい。

俺は本を本棚に戻すべく、先の女子生徒から返却された本を見た。

『僕の彼女は王子様』

そうか……なんかよく分かんが、頑張れよ。

つかこれ、ジャンルは何だ？恋愛か？同性愛ってジャンルはあるのか？

「哲学だな、哲学」

俺は迷う事なく哲学の棚に本を戻した。

暇になる。

だから俺は、本のカバーを入れ換えて遊ぶ事にした。

恋愛の棚に『走れメロス』があるなど、図書室にある本のカバーを手当たり次第に入れ換えていった。

「フヒヒヒヒ。俺に逆らう奴はみーんなこっとなるんだぜー」

「神風さん……」

咲蘭か……。

「俺を学級委員にしろ。こうなりたくなかったらな」

「何を言ってるんですか……？」

真面目に返されてしまった。

くだらない事をやっていた自分が阿保らしくなった。

「とにかく直しておいて下さいね……」

「ああ」

俺はテキパキと本のカバーを元通りにしていく。

結局カバーを直し終わるまでに要した時間は、入れ換えていく時間の三倍かった。

行きはよいよい帰りは怖い。まさにこれだなと思う。

「終わったぞ咲蘭」

「お疲れ様でした……」

受付の椅子に座って本を読む咲蘭。

無表情無着色。添加物を一切使っていない有機人間、鮎川咲蘭。

「今何か失礼な事考えてませんか……？」

「え？ いやっ……シーラカンスの産卵について考えてた」
「そうですか……」

危ない危ない。咲蘭はかなり鋭い勘の持ち主だったんだな。

「そうです。だから気をつけて下さい……」

え？ 何を気をつければいいんだ？

「分からないのですか……？」

ンギヤアアアー！！！！ 心読まれてるー！！！！

「神風さん……」

「ん、何だ？」

咲蘭は首を横に振った。

「何でもないです」

「何でもないのかよ……」

会話も途切れて、また暇になった。

やる事が無いので俺は椅子に座り、咲蘭の顔を見つめていた。

咲蘭とはどこかで会った事があるのだろうか。

どうも俺には彼女が初対面の人間とは思えなかった。

駄目だ……。眠い……。

- - - - -

「楓？」

体がピクンと動いた。

「こんな所で寝てたら風邪ひくわよ」

聞こえてきたのは真琴の声。

俺は目をつつすらと開ける。

オレンジ色の図書室がそこにあった。

「んっ……」

「楓、あんた寝過ぎよ」

「ああ……すまん……。……真琴はどうしてここにいるんだ？」

血が上らない頭ながら、俺はその違和感に気付くことができた。

「咲蘭ちゃんが教えてくれたの。楓が寝てるって」

「んっ……そうだったのか……。ふあゝあゝ」

俺は立ち上がって、大きく欠伸をした。

パサッ

しかしその時、俺の体から何かが落ちた。

フワッと香ったのは咲蘭の香り。

カーデガンだ。

「それ、多分咲蘭ちゃんのカーデガンよ」
「そっか」

言いながら俺はカーデガンを拾った。

「帰るか」
「うん」

春。

「楽しみだな」
「何がよ？」

そんなの決まってるだろ。

「学園生活が、さ」
「そう。それはよかったわね」
「真琴は楽しみじゃないのか？」
「まあ……詰まらなそうじゃないけど……」
「そっか」

出会いの春。

その言葉通り、昨日今日と、俺は色々な人に出会った。

不安は無い。

「真琴、競争するか？」

「はぁ！？私部活で疲れてるのよ！？」

「動けなくなつた奴から切り捨てる。それが俺のポリシーだー！！！」

俺はそう叫びながら走り出した。

これから訪れる、新たな学園生活に向けて。

Ep1: 出会いの春に出会った人達 - 前編 -

「んっ……」

カーテンの隙間から差し込む陽光が、俺の瞼の裏を刺してきた。
そんな鬱陶しい陽光を避けるべく、俺は掛け布団を頭上まで被り、
そして再び睡眠の体勢にはいつていく。

……。

……………。

「んっ……」

体が一度ピクツと動き、そこで再び目が覚める。

俺は上半身をもそつとベッドから起こし、頭をポリポリと掻きながら時計を見た。

「九時半……」

それを見た俺はベッドから下り、部屋の隅にかけてあつた制服を取る。

着替える途中は、瞼を開け閉めし、体をゆらつかせながらだったものの、制服に着替え終わると、眠気は完全に消え去っていた。

どんな日だろうと朝ごはんを欠かす事はできない。それを信条に
生きている俺は階段を下り、キッチンへと向かう。

キッチンに着いた俺は迷う事なく、テーブルの上に置いてあつた

六枚切りの食パン一枚をトースターに入れ、続いて冷蔵庫から卵とハム、バターを取り出す。

「ふあゝあゝ」

春ならではの、大きな大きな欠伸をしながらコンロのガス栓を開け、そして換気扇の電源を入れた。

コンロの火を付け、その上に卵焼き専用のフライパンを乗せる。

「すゝ……。すゝ……」

ガァン！

「痛っ！熱っ！」

うたた寝をしてフライパンに頭を突っ込んでしまった。

「焼くのは俺自身じゃないぞ……」

一人でそう呟いた後、四角いバターを一切れ、温まったフライパンに乗せた。

ジュー。という香ばしい音と、バター特有の食欲をそそる匂いが俺の胃を刺激する。

バターが全て溶けた後で、ハムをフライパンにほうり込み、直ぐさまその上で卵を割った。

卵、バター、ハムが奏でる匂いを嗅ぎながら待ちたい所だが、ここは我慢。卵焼き専用フライパンの蓋が無いため、他の蓋を適当に選び、ハムエッグが乗るフライパンの上に被せた。

「ふあゝあゝ」

閑静な住宅街。

カラスが屋根の上を歩き、塀の上を猫が走り、近くの公園ではお年寄りがゲートボールに汗をかく、とても平和な住宅街。

俺、神風楓はその一角にある、少し広めな一軒家に住んでいる。至って普通の住宅街に住んでいる俺。しかし何を隠そう、俺の親父はかの有名な、神風カンパニーの社長だ。

偏^{ひん}に社長といっても収入幅はピンキリで、サラリーマン平均収入より少ない収入の社長もいるわけだ。

しかし、俺の親父は違う。

神風カンパニーはここ数年で急成長し、今となってはIT企業随一と言われるまで成長した企業だ。

まあつまり、何が言いたいかというと、親父は凄腕社長だという事だ。

チンツ

かわいらしい音と共に、焼けたパンがトースターから飛び出した。俺は早速焼き上がったパンを皿に乗せ、そしてその上にハムエッグを乗つける。そして画龍点睛に、冷蔵庫からケチャップを取り出し、それにかけた。

「もぐもぐ」

目玉焼きにはケチャップ。これこそ至福の時。

ハムエッグトーストをぺろりを平らげた俺は歯を磨く。そうしてメロンパンを五つ鞆に詰め込んだら準備完了。

「いつてくる」

俺は誰もいない家に、誰に言う訳でも無く挨拶をして外に出た。

家から学校までは歩いて十五分。家の正面には川が流れていて、その川沿いを歩いていれば学校に到着する事ができる。

桜舞い散る川沿いを歩いていく俺。勉学に励もうと、学校に向かう俺の努力を嘲笑うかのように、春特有の強い向かい風がビュービュー吹き付けてくる。

どんなに足を動かしても前に進まない。前に進むどころか、逆に押し戻されているような。そんな感覚すら覚えてしまう程強い。

「やっと着いた……」

そんなこんなでなんとか辿り着けた、私立聖蘭学園。

ハメートルはあるうかという超巨大な校門の隣に専属の警備員。レンガで舗装された歩道。正面にある校舎との間にある大きな噴水。他にも色々あるのだがとにかく、この学園は至る所で贅沢の限りを尽くしている。

そんな超豪華さを看板に掲げている学園に通うのはやはり、政治家の子や皇族など、やんごとなきお坊ちゃまお嬢様達。

日本一やんごとなき高校。
それこそが俺の通うこの、私立聖蘭学園だ。

「おつす、おつちゃん。毎日お疲れ」
「楓は今日も遅刻か」

とある理由で仲が良くなった中年警備員と挨拶を交わし、そして学園内に足を踏み入れた。

高校二年生の春。

俺の物語はここから始まっていく。

- - - - -

教室の扉の前。俺は遅刻したのにも関わらず、何食わぬ顔で普通に扉を開けた。

ガラガラ

「おは - -」
「死ねっ神風楓っ！」

ヒュンヒュンヒュンッ！

それは教室に入ると同時だった。

挨拶を言い終える前に、教壇の方から俺に向かって飛んでくる無数の刃物。そして殺意のこもった服部守歌の声。

「ぬおっ！」

カンッ カカカ カカンッ！

間一髪。鞆の横っ腹で十本全てのクナイを受け止める。

「チッ」

クナイを投げ付けてきたのは歴史担当の服部守歌^{はっとりもりか}。彼女は、かの有名な忍者の家系で、規律を乱す人を殺す……指導するのが生き甲斐の、永遠の二十歳。

ちなみに一人称は俺。

「俺の腕も鈍ったか……。まあいい。神風、さっさと席に着け」

俺は鞆に付いたクナイを全て捨て、自分の席に着いた。

「完全に油断してましたね……」

俺が一番後ろの真ん中にある席に座ると、右隣に座る少女が話し掛けてきた。

紫がかかった黒い長髪を垂れ流し、非常に整った容姿をしている。表情が冷たく、クールビューティーとも言われている、学園マドンナの一人。名前は、鮎川咲蘭^{あゆかわさくら}。

聖蘭学園理事長の娘であり、俺と同じ図書委員。ちなみに咲蘭の名前にもこの学園と同じ、蘭の字が使われている。

「ああ。二時間目が歴史って事をすっかり忘れてた」

俺は右隣りに座る咲蘭にそう言つと、何故か俺の前の席に座る男が後ろを向いた。

その男は髪を金色に染め、学園の問題児のリーダーとして君臨し、弱きを滅ぼし強きを助けるといつのを信条に生きている、言わば人のかざかみにも置けない――。

「ちょっとそれは言い過ぎなんじゃないっすかね――！」

「いや、俺は真実しか伝えていないぞ」

本人が不満そうなので、もとい、頭が悪い上に運も悪い。成績も悪けりゃ、顔も良い訳じゃ無い。喧嘩も弱いし、とにかく駄目な人間――。

「もうやめて――！！　俺が悪かったから――！！」

「仕方ねえな、今回は許してやるよ」

こいつの名前は板垣慎吾。いたがきしんご

有名な物理学者を両親に持ち、家族で物理オタクという、物理オタク家族の長男だ。

しかし、そんな境遇にあるこいつは物理がまるで出来ないという駄目っぷりを発揮している。

キンコーンカーンコーン

「よし、これで俺様の授業は終わりだ。神風、もし次に俺様の授業を遅刻してきたら命は無いと思え」

チャイムが鳴ると、授業を終えた服部はそう言い残して教室を出

ていった。

「神風さん……。私はあなたのことを絶対に忘れません……」

「もしそうだったら咲蘭の枕下に立ってやるよ」

「……それは恐いです……」

と、咲蘭は物静かそうな顔や雰囲気をしているのだが、話してみると意外と面白かったりもする。

「楓さんっ！」

「神風楓！」

「ブサイク！」

と、俺が咲蘭と話している時に、左に二つ離れた席に座る少女と、彼女を取り巻く二人の少女。計三人がやってきた。

「どうして寝坊しましたの!？」

「どうせならいつそのこと、一生寝てて下さるかしら？」

「そうですわ!このブサイク！」

どうして遅刻しなかったの。じゃなくて、どうして寝坊したの。

と聞いてきた彼女は、大財閥である鳳仙院グループのトップ、鳳仙院和司ほいんかずしの一人娘である、鳳仙院飛鳥ほうせんいんあすかだ。

彼女はまさに学園のマドンナといった顔立ちで、長くて金色の髪をエビちゃんみたく名古屋巻きにしている。

美しい顔立ちとボディーライン、スリムなふくらはぎと太ももに学園生はメロメロ。今まで振った男は五十を越えるとの噂もたっている、学園マドンナの一人。それが彼女だ。

ちなみに、遠回しに死ぬ。と言ってきたのは、右ウィングの三岸みぎし。

そして俺の顔を全否定してきたのは、左ウイングの佐古木。
基本は飛鳥、三岸、佐古木の順番で俺に文句を言ってくる。

「目覚ましをかけ忘れた」

「あら、高校生のくせに、目覚ましもろくにかけませんか？ 哀れですわね」

「いつその事、自分が目覚ましになればどうかしら？」

「オホホホホ。元々目覚ましみたいな顔していらっしゃいますし」
「ははっ。お前ら、人の事言えんのかよ」

「「「言えますわよ！」「」」」

このクラスになってから二週間が経ち、飛鳥と左右ウイングが繰り出してくる、嫌みの嵐にも大分慣れてきた、今日この頃。

飛鳥は一人娘でお金持ちでかなりの美人という要素が絡み合って、かなり高飛車な性格だ。

この高飛車お嬢様をどうにかする事はできないのか。

それができないんだよ。

鳳仙院グループは、神風カンパニーの大株主という上下関係がある。故に、俺はなかなか飛鳥に仕返しが出来ずにいる。

「飛鳥」

「なんですの？」

「バーカ」

親父、お前は常に首の皮一枚なのだよ。ハハハハハ。

「楓ーっ！」

ふと、俺を呼ぶ声が聞こえてくる。

「あ、真琴じゃん。どうして今朝は起こしてくれなかったんだ？」
「今日は朝練だから起こせないって言ったでしょ！　だからあれだけ、目覚ましかけておけって言ったのに！」

と、席替えをする前は俺の隣の席にいた口うるさい彼女は、小学校以来の付き合いである幼なじみ、いなせまこと稲瀬真琴だ。

茶色いツインテールの髪と、怒っていても可愛く見える容姿を持つ学園マドンナの一人。

彼女も飛鳥同様かなり告白をされていて、と言っても飛鳥はあくまで噂なのだが。この十六年間の人生で、告白してきた男子の数は十を超える。

特技は新体操で、去年インターハイでベストフォー入賞を果たした実力者だ。

しかし、そんな人生の成功者に見える彼女にも、欠点がある。

それは、彼女の家庭がかなり貧乏だという事。

そのため真琴の母親であるいなせひより稲瀬日和は、真琴を玉の輿に乗せようと、必死に俺と真琴をくつつけようとしてくる。

まあそんな事はどうでもいい。問題は、超貧乏人の真琴が、何故、この月百万もの学費がかかる学園に入学できたかという事。

「過ぎた事とやかく言っても仕方ない。問題は次、次にどうするかだ」

「何よその無駄な前向き精神は……」

それは俺の親父が学費を肩代わりしてくれているからだ。

「楓さま」

今度は廊下から俺を呼ぶ声が聞こえてくる。

教室の扉に視線を移すと、そこには茶色く軽いパーマのかかった長髪。そして左耳の上にある髪止めがアクセントとなって、美しいながらも可愛さを見せる美少女と、黒い長髪を後ろで纏めるポニール姿の美少女が立っていた。

冷たい声で俺の名前を呼んだ少女の名前は綾小路時雨^{あやのこうじくぐれ}。三年生で、聖蘭学園の生徒会長を勤める。

彼女の容姿、スタイルなど、美人の要素全てにおいて人類のトップクラスに位置していて、間違いなく学園一のマドンナと呼べる存在だ。

そして時雨の隣にいる少女は時雨と同じ三年生で、時雨の親衛隊長を勤める、酒城花音^{さかぎかのん}。彼女も咲蘭同様、クールビューティーという単語が似合う美少女だ。

しかし恐ろしいことに花音は、常に日本刀を腰にぶら下げている。

本当に切る気は無いとは言っても、身構えちゃうよな。

「楓さま、明日の昼休みは、空いていますか？」

時雨は低い声で、冷たく言う。

何者をも寄せ付けない氷の生徒会長。それが時雨についているあだ名だ。

「昼休みは空いてるが。どうしたんだ？」

「本当ですか？」

今、にぱーっと笑った時雨から発せられたのは、氷の生徒会長とは程遠い間の抜けた声。

「ゴホンッ！　そうですか。それなら少し生徒会関係の仕事を手伝っていたきたいのですが」

しかし時雨は、一度咳払いをしてごまかした後、すぐに氷の生徒会長へと戻った。

俺と真琴は時雨の事情を知っているのに驚かなかったが、事情を知らない飛鳥と慎吾は不思議そうな顔を浮かべている。

そして咲蘭は、事情を知っているのか知らないのか、とにかく無表情なので何も読めない。

キンコーンカーンコーン

授業開始を報せるチャイムが鳴った。

「分かった。真琴も手伝うってさ」

「誰も言っていないわよ！」

「ありがとうございます。ではまた」

「ちよっと時雨さん！？」

言って時雨と、その横にぴったりと付いている花音は、真琴を無視し、颯爽とこの教室を去っていった。

「生徒会長……なんて美しいのかしら……」

「どうして神風所には美女が集まるんだ」

「あんな問題児のどこがいいんだよ」

「凄い嫉妬の嵐だな、楓」

「ん、何がだ？」

慎吾は意味深な言葉を言い、そのまま前を向いてしまう。

そして間もなく、古文担当の教師が入ってきた。

「さあ古文を始めるザマスよ。席につくザマス」

古文を担当するのは、このクラスの担任でもある、ザマス斉藤だ。
ザマス斉藤というのはあだ名で、本当の名前は……。

本当の名前は……。

名前は……。

「咲蘭、名前は？」

「鮎川咲蘭です……」

「違う違う。あいつの名前は？」

「鮎川源一郎です……」
あゆかわげんいちろう

「理事長の名前でもなくてさ。あいつだよあいつ」
かんなしずる

「神流静流です……」

「あ、そうか。思い出した」

そんな神流静流ことザマス斉藤は、語尾がおかしい割には全く面白くない教師だ。

「やんごとない。は、高貴な。という意味ザマス」

古文以上に眠気が襲ってくる教科が他にあるだろうか。

加えてその古文を担当するのはザマス斉藤。

古文、プラス、ザマス斉藤、イコール……。

「Zzzz」

居眠り。

キンコーンカーンコーン

チャイムという名の目覚ましだが、俺を現実世界へと引き戻した。

「楓さん！！！！ 真琴さん！！！！」

起きたと同時に聞こえてくる怒鳴り声。

「何だよ飛鳥、右、左。朝っぱらから騒々しいな」

「授業中に居眠りするなど。何回言ったら分かるんですの！ しかも今は朝ではなく昼休みですわ！」

「右ではなくて三岸！」

「私は佐古木！」

「え、俺、二時間またぎで寝てたのか？」

道理で眠気がすつきりさっぱり晴れている訳だ。

俺は一度大きく伸びをしてからクラス内を見渡してみる。

窓際の一番前に座る真琴も寝起きの顔をしていて、大きな欠伸をしながらこっちに来た。

「真琴さんも居眠りしてましたわね。罰として二人には放課後、教室の掃除をやってもらいます」

「やれやれ」

「罰ですわよ」

「嫌だ」

「嫌よ。居眠りしただけで掃除なんて、お断りよ」

掃除は清掃業者を雇っているの、本来はする必要の無い仕事だ。それをやれと言っんだから、飛鳥は頭が悪いと思えない。

「あなたたちがなんと言おうと、これは決定事項ですわ」

「残念でしたわね」

「ではこの学園のお掃除、頑張ってくださいねえ」

「「「オーッホッホッホ」」」

飛鳥と左右はそう言い放つと、高笑いと共に教室を出ていった。

いつも通りの光景なので、俺、咲蘭、真琴、慎吾の四人は何事も無かったかのように机をくつつける。

真琴は普通の弁当箱を、慎吾と咲蘭はいかにも高級そうな重箱を。そして俺は、鞆からメロンパンを取り出した。

「じゅるるる……」

メロンパンを口にする俺。

そんな俺を見る真琴の目は虚ろになり、そして口元はナイアガラ

と化した。

「稲瀬、口がナイアガラになってるよ」

「はっ！」

慎吾に言われてはつと我に帰る真琴。

それを見た俺は、さらに美味しそうに。嫌みったらしくメロンパンを頬張る。

「じゅるるるるるる」

このままでは真琴はお嫁にいけないので、俺は鞆からメロンパンを一つ取り出し、彼女に与えた。

「わーい」

箸を置き、直ぐさまメロンパンに噛り付く真琴。

そう。何を隠そう稲瀬真琴こと彼女は、好きすぎて性格が変わってしまっ程メロンパンが大好きなのだ。

真琴いわく、朝昼晩どころか、一生メロンパンだけを食べ続けていても大丈夫よ。

「楓、もうないの？」

「太るぞ」

メロンパンを与えてから僅か十秒足らずで完食する真琴の台詞は、いつも決まってこれ。

そんな真琴に返す俺の返事は、いつも決まってこれだ。

と、メロンパンを食べた俺は喉が渴いたので、鞆から飲み物を出

そうとした。

しかし――。

「あ、飲み物入れるの忘れてた」

鞆の中を何度も手探りで探してみるものの、やはりジュースは入ってなかった。

確かに朝、飲み物を入れた記憶は全く無かった。

「ちよつと買いに行ってくる」

俺はそう言つて教室を出た。

廊下を歩く俺の耳には、ウフフフ。オホホホ。そんな笑い声ばかりが入ってくる。

階段を下りて昇降口近くにある自販機へと向かう。いくら超一流学園だからと言って、なにも自販機を必要しないなんて事は一切無く、さすがに自販機の一つや二つくらいはある。

と言いつつも、やはり自販機の実用性はあまりない。

昼休みと言つたら、自販機が最も混雑する時間帯。そんな時間帯でさえ誰も並んでいなく、すんなりとジュースを買うことが出来るのだから。俺としては有り難いが、とにかく需要が無いという事だ。

ピッ

ガコン

俺は右の自販機で、マンゴージュースを買った。

「キヒヒヒヒ。俺の好きなフルーツは、みーんな液体になって飲まれる運命なんだよ」

固体のままで食べられず、さぞ悔しかろう。さぞ悔しかろう。

「楓……君……？」

楓……。

君？

「楓君だよね……？」

俺は、その人の顔を見るべく振り返る。

が――。

「お、お前はっ！？」

――なんとそこには驚くべき人物が立っていたのだ。

自販機を見ながら笑みを浮かべていた俺。そんな俺の後ろから聞こえてきた、あどけない少女の声。

俺が振り向いた先にいた少女はいったい誰なのか。

そして目玉焼きにケチャップをかける俺は間違っているのか。

次回に続く。

Ep2: 出会いの春に出会った人達 - 後編 -

「楓君……だよね……？」

「お前は……」

ジューズを自動販売機から取り出したその瞬間、背後から少女の声が聞こえた。マンゴー百パーセントの缶ジューズ片手に、俺は振り向く。

前回とはリアクションが多少違う俺がそこに見たのは――。

「なんでここにいるんだクソ親父……！」

「会いたかったよ楓――」

「女言葉をやめろ！声色を変えるな！抱き着くな！」

俺は体に纏わり付く、スーツ姿の親父を引きはがす。親父は鼻息をフゴフゴいわせながら離れた。

「何故親父がここにいる！？出張に行つてたんじゃなかったのか！？」

「そう、だから出張帰りに寄つたまでさ。楓に会いたくて」

「そんな事でいちいち寄るな！」

「まあまあ、そう言うなよ。折角会いに来たんだから。いやゝそれにしても、楓」

「それにしても……何だよ」

親父はにまーつと嫌らしい笑みを浮かべる。それだけで蹴り飛ばしたくなるくらい腹の立つ顔だ。

「もしかして、新たな少女との出会いだと思つた？いやゝ残念だっ

たねえ。呼んだのがパ、パ、で！」

「吹っ飛べこのクソ親父がー！！！」

ドッカーン！

「バイバイキーン！」

親父は俺の一蹴りで、お星様となった。

「ったく、本当にそう思ったじゃねーかよ」

馬鹿馬鹿しい。

と、俺はぐちぐち言いながら教室へと戻っていくのだった。

キーンコーンカーンコーン

「はい、今日はここまでザマス」

食事後の二時間は眠気との戦いだった。

満腹感からくる眠気と、春の陽気からくる眠気とのダブルパンチ。

俺は五時間目の授業を受けていた筈だったのだが、気付いた時には帰りのホームルームが終わっていた。

「俺はついに時間移動を身につけたのか」

「神風さん、制服の右腕の裾……」

咲蘭が俺の右腕を指差し言うので、視線をゆっくりと右腕に向ける。

右手の裾にはよだれの跡。

「おはようございます楓さん……」

「お、おう。おはよう、咲蘭」

右腕に付いたよだれをティッシュで拭きながら、咲蘭に答えた。

「楓さん」

「神風楓！」

「ブサイク！」

そして間もなく背後から聞こえた飛鳥と三岸と佐古木の声。

「はい、掃除用具ですわ」

俺が振り向いた瞬間、何故か飛鳥から雑巾、バケツ、箒、ちり取りを渡された。

俺はそれらの掃除用具と飛鳥と三岸、佐古木を交互に見る。

「お前らの顔を掃除しろ、ってか？」

「「「違いますわよ！」」」

「だったら何故それを俺に渡すん……だ……。あ、思い出した」

確か、授業中に居眠りした罰だったんだっけ。

「ええ、それではお掃除頑張ってくださいね。ごきげんよう」
「ごきげんよう」

そうして三人は、高笑いと共に教室を出ていった。

「咲蘭、俺ってそんなにブサイクか？」

「いえ。多分、佐古木さんにとっての挨拶みたいな物なのでしょうね……」

「そうか。精神を攻めてくる挨拶ってのも嫌なもんだけだな」

「そうかもしれません……」

言いながら咲蘭は席を立ち上がった。

「明日の放課後は委員会ですから、忘れないで下さいね……ではさようなら……」

「そっか、明日は火曜日だったか。分かった、じゃあな咲蘭」

咲蘭は気配を消して移動しているかのように、スッと教室を出ていく。俺と真琴も、教室から生徒が居なくなるのを見計らい、掃除を始める。

真琴が飛鳥に対する怒りを全て掃除にぶつけてくれたお陰で、それを短時間で終わらせる事ができたのは、嬉しい誤算だった。

そうして掃除を終えた真琴は部活へ、俺は商店街へと向かった。

「ありがとうございましたー」

ガ―

「むふふふ」

帰ったら思う存分食べてやるからな、『ふんわりやわらかカスタードクリームパン』ちゃん

こういうのって食べる時も幸せだけど、それ以上に持ち帰る時が幸せなんだよな。

ちなみに言っておくが、俺が好きなのはクリームパンじゃなく、カスタードクリームだ。

「魚泥棒だー！！！！捕まえてくれー！！！！」

ん？何だ何だ？

クリームパンを見つめたままコンビニの前に立っていると、魚屋のおっちゃんの、商店街中に響き渡るような大きい叫びが聞こえてきた。

「魚泥棒だー！！！！捕まえてくれー！！！！」

魚泥棒？

俺は魚屋のおっちゃんの声ができる方を見た。

「女の子？」

俺が見た先には、魚を右手に持った少女が逃げるように走っていて、どうやら魚屋のおっちゃんに追われているみたいだった。

「追われてるみたいだっておいおい……」

このままだとぶつかるぞ!?

「うわあ!どいてどいてー!」

「何で俺の所に来るんだよー!」

ドッカーン!

「うわーっ!ー!」

「キヤー!ー!」

俺とお魚くわえた少女は見事正面衝突。二人で尻餅をついた。

「いててて…って右手にあったクリームパンが無い!?!」

俺の右手にあったクリームパンは…

俺の尻の下……。

「ぬああー!俺のクリームパンがああー!」

見るも無惨な形にいい!ー!ー!

俺は立ち上がって、少女の胸倉を掴み立たせた。

「貴様ああ!ー!俺のカスタードクリームをおお!ー!」

「ごめんなさいごめんなさいー!」

「俺のクリームパンはブーブークッションじゃねーんだぞおおー!ー!ー!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいー！！！」

と、俺の正面。少女の背後に魚屋のおっちゃんがやってきた。

「楓の坊主、少し落ち着いたらどうでい？」

「クリームパンの上に座ったっておならの様な音が出る訳……………魚屋のおっちゃんか、分かった。少し落ち着いてやる」

俺は少女から胸倉を離した。

そして潰れたクリームパンの袋を手に取り、少女の前に突き出した。

「おいお前」

「私の事？」

「お前が潰したクリームパン。弁償しろ」

「えっ、そんな事言われても……………」

「何だお前、まさか弁償しないとでも言うのか？」

「だって……………」

「だってもヘチマもあるかああー！！！」

「ひゃああーごめんなさいっ！」

「謝るくらいなら弁償しやがれええー！！！！！」

「楓の坊主、とりあえず落ち着けてんでい」

俺は再び少女の胸倉を掴み怒鳴り付けるが、再びおっちゃんに制止される。

俺は再び少女から手を離した。

「楓の坊主、そいつには弁償なんかできないと思っぜ」

魚屋のおっちゃんが、少女を指差しながら言う。

「その魚をくわえた娘は一文無しだ」

「一文無し？だからこいつは魚を盗んだのか？」

「そうさ。だろ、嬢ちゃん？」

「うん……」

それを聞いた俺は視線をおっちゃんから少女に移し、全身をなめ回すかのように少女を凝視する。

ふくらはぎ辺りまで伸びている黒髪。クリクリとした、今にも吸い込まれてしまいそうなくらい大きい目。みずみずしく、とても柔らかそうな唇。ゆで卵の様に、白くてつやつやな肌。

何よりも目立ったのが後頭部に結び付けられている、ピンクの大きなリボンだ。

その少女は可愛い部類に入るところか、身長以外に否の打ち所がないくらいに美少女だった。

そしてなんと、少女は聖蘭の制服を着ていて、一年生の学年色である緑のスカートをそれに付けていた。

そしてその少女は、捨て猫みたく俺達を交互に見る。

「金が無いなら魚を返すんだ」

「……」

俺は普通に観念すると思っていたがしかし、少女は首を横に振った。

「今日は財布を忘れたからお金が無かったの。だからお金はまた今度払うよ……」

言って少女は、魚を大事そうに抱える。

「阿保かお前、そんな事が通じる世の中じゃねーよ」

「絶対に払うもん！」

「そんな保証がどこにある？どうせ夜逃げするに決まってるだろ」

「払うつたら払うもんー！」

少女は腹のそこから声を出して怒鳴り付けてきた。

「あの子、お前――」

「――なんだよ嬢ちゃん。そうならそうと、はっきり言ってくれればいいのによ！ガハハハハッ！」

おっちゃんは少女の肩をバンバン叩きながら笑った。

俺は驚き、おっちゃんを見る。

「おいおっちゃん、こいつの言う事を信じるのか？」

「あたぼうよ。その娘は絶対に払うって言ってるんだ、絶対に払ってくれるさ。それに嬢ちゃんが嘘を言ってるかどうかは目を見りゃ分かる」

少女の目を見るものの、俺には全く判断がつかなかった。

まあ、おっちゃんがそう言うなら、俺は何も言えないが……。

「ありがとうおじちゃん！今度絶対に払うからっ！」

「ハハッ！いいってことよ。そんじゃあ俺は仕事に戻るぜ。じゃあな楓の坊主、可愛い泥棒さん」

そう言い残し、おっちゃんはニコニコしながら商店街の魚屋へと戻っていった。

「よかったな、あのおっちゃんがいい人で」
「うんっ！」

まるまる一匹の生魚を抱えたまま笑ってる……。なんともシュールな光景だ。

「しかし金が無いのにどうして魚なんか盗んだんだよ」
「うん……。実はね……」

- - - - -

「成る程な。この捨て猫に餌を与えようとしたわけか」
「うん。帰り道にたまたま見掛けたんだけど放っておけなくて……」

俺は少女に案内され、商店街の路地裏へとやってきた。路地裏には段ボール箱が一つあり、その段ボール箱の中には子猫がいた。少女は子猫を段ボール箱から出し、魚を与える。すると猫はムシヤムシヤとその魚を食べ始めた。

俺達二人はその猫の前にしゃがみ、その様子を見る。

「こうして見ると、猫って可愛いんだな」
「うんっ！とーっても可愛いよっ！」

魚を食べる子猫の頭をツンと突つく俺に、少女はとても嬉しそうに言った。

そんなに猫が好きなんだろうか。

「俺の名前は神風楓だ。お前の名前は？」

「えっ!？」

「自己紹介だよ。俺の名前は神風楓だ」

猫を見ながら俺は二度、自分の名前を言った。

「神風…楓…君……？」

「そうだ。何かおかしいか？」

「ううん…何でもない……」

正直とてもじゃないが、何でもないようには見えない。

俺の名前は、人のテンションを下げるような名前じゃないんだが…。

「どうしたんだ？」

「うん…、どこかで聞いたことあるような気がして……」

「それは無いだろ」

多分、こんなに可愛い少女と会ったことがあるなら、絶対に覚えていと思う。

それに俺は有名人って訳でも無い。

「何かの間違いだろ」

「うん…多分……」

少女は未だにどこか腑に落ちない表情を見せたが、無理矢理かどうか、納得した表情になる。

「そっか。私の名前は天堂^{てんたい}つばさだよ」

と、自分の胸に手を添えながら言う。

「天堂……つばさ……？」

「うん、天堂だよ」

おいおい、冗談にもほどがあるぞ……。

「つばさ、か。いい名前だな」

「うんつ。ありがとう！ところで楓君は私と同じ学校みたいだね？」

「ああ、俺は二年生だ。お前は一年生だな？」

「うんつ。ぴっかぴかの一年生なんだよ」

「そうか、それはよかったな」

と、自己紹介もいいのだが、俺はそれよりも猫の事が気になった。

「で、どうすんだこの猫」

「私が持つて帰る……って言いたい所だけど……」

「親が許さないってか？」

つばさは無言で首を縦に振った。

まあ、つばさの家で飼えないとなると……。

「ここに捨て置くか」

「ええ……！？私でつきり、俺が飼う。って言うかと思ってたのにつ
！」

「馬鹿言っな。俺は動物が嫌いなんだ」

「そんな事言わないで……あれ、もう食べ終わったんだ？」

「ニャン」

つばさは話の途中、猫が魚を食べ終えた事に気付く。

そして俺が見たと同時にその子猫は、俺の肩の上に移動してきた。

「どけ、チビ猫が」

「ニャンッ！」

何を言ってるかさっぱり分からんが、多分、嫌だ。とても言ったんだろうか。

「アハハ。気に入られたみたいだね」

「どけと言ってるだろ」

「ニャーゴー！」

嫌ーだー。って言ったのだろう。

仕方なく俺は猫の後ろ首を掴み持ち上げた。しかし猫はその手から逃れ、そのまま俺の手を伝い、今度は頭の上に登ってしまった。

「あきらめなよ楓君。もう楓君と離れたくないみたいだよ」

「ニャーン」

「この猫畜生がっ！」

俺は頭の上にいる猫を掴もうとする。が、頭の上で俺の手を回避する猫はなかなかすばしっこく、手にかすりもしなかった。

「ニャーゴ」

「はぁ……はぁ……」

「いいなー楓君は。そんなに懷かれててー」

「よくない！」

しかしこの猫、どうするかな……。

「名前はどうしようか？」

「はぁ！？本当に飼わせる気か！？」

「そうだよー！だって、捨て置いたりしたら子猫が可哀相じゃんー！」

はぁ… やっぱりこうなっちゃうのね……。

動物は好きじゃないんだけどな…。

「分かったよ。捨て置かれる気持ちはよく分かるからな。確かに可哀相だよ」

「でしょでしょ？じゃあ飼ってくれるんだよね？」

「ああ」

「やったー！」

つばさは自分が飼える訳じゃ無いのにも関わらず、とても大喜びしていた。

「それじゃあ今度こそ、名前はどうしようか？」

「そうだな… ハム太郎なんかはどうだ？」

「それじゃあハムスターだよ」

「じゃあ、中村あつしは？」

「何言ってるの？」

「クリント・イーストウッドならどうだ」

「カッコイイけど… 猫にそれはちよつと……」

さつきから文句の多い奴だな。

「はいはい！私思い付いたよ！」

つばさは右手を挙げて言ってきた。

思い付いたって言っても、どうせろくな名前じゃないんだろう。

「カエデは？」

「却下だ」

やはりろくな名前じゃなかった。

「えー、いい名前じゃん！ね、カエデ？」

「ニャン」

「ほらほら、カエデが気に入ったみたいだよ。ね、カエデー」

つばさは俺の頭に乗っている子猫を撫でながら言う。

「じゃあ、カエデに決定。イエーイ、パチパチ」

「ニヤーゴ」

なんと俺の異議の方が却下され、子猫の名前はカエデに決定してしまった。

「こんなの無効だ！却下だ！」

「なら多数決をとるよ。カエデがいいと思う人、はい」

「ニヤーゴ」

「はい、賛成過半数により決定。イエーイ、パチパチ」

「猫票は無効だ！」

「往生際が悪いよ楓君。カエデ自身がこの名前に賛成したんだから、例えば私が反対したってカエデはカエデだよ。分かった、楓君？」

楓とカエデがごっちゃになってややこしい……。

「うん。名前も決まったし、私は帰るね。じゃあね楓君、カエデ」
「ニャン」

「……猫畜生と同じ名前……」

落ち込む俺をよそに、元氣一杯なつばさは弾むようなスキップで夕暮れの町へ消えていった。

「俺も帰るか」
「ウニヤ」

カエデは、話し掛けていないのに返事をしてきた。俺は、こいつに人間の言葉が通じている事が今更ながら気になってしまう。

「なあ、名前変えないか？」
「ニヤーゴー」

嫌ーだー。ね。

「分かったよ。よろしくな、カエデ」
「ニャン」

やはりカエデには人間の言葉が通じているんだろうか。
まあ、そんなのどっちでもいいか。

俺はカエデを頭から肩に移し、そして茜色の世界を一步一步。家に向かって歩き出していった。

- - - - -

ピンポン

家に帰り、しばらくのんびり過ごしていると、インターホンの音が鳴り響く。

「楓ー、パパは今手を離せないから、楓が出てくれないかー!」
「分かったよ」

俺はソファーから立ち上がり、キッチンの横にあるモニターで来客を確認する。

モニターの向こうに居たのは、仕事帰りのひよ姉だった。

「鍵は開いてるから、入っていいぞ」

俺は受話器越しに、玄関前にいる彼女に呼び掛けた。

「あらー。女性を家に連れ込んだりして、何をする気なのかしらー」

「嫌なら入らなくてもいいんだぞ」

「いやーん。そんな事言って、本当は嬉しいくせにー。楓ちゃんのエロスケベー」

ガチャ

俺の名誉を汚す一言と共に、ひよ姉が家に入ってくる。
誰がエロスケベだ、誰が。

「ウフフフー。か、え、で、ちゃんのエロスケベー」
「ぬおわっ!」

むにゅーん

抱き着いてくるなよ三十路！

「んまー！誰が三十路よ、失礼しちゃうわー！」

まるで俺の心を読んだかのように。三十路は俺から体を話し、目を三角にして怒ってきた。

「真琴は今十六才だろうが！」

「そんなの私が中学生になる前に真琴を産めばいいのよー！むきー！」

三十路というのがよっぽど嫌なのか。ひよ姉はめっちゃめちな事を言っている。

「まあ、見た目は二十代だから、三十路とかそんなに気にすること無いって」

「いやーん。私、楓ちゃんに口説かれちゃったー。真琴に悪いわー」

誰もお前なんか口説いてねーよ、馬鹿。

さて、そろそろ説明しよう。

このお姉系な喋り方をする、真琴にそっくりな顔をしたこの女性の名前は、稲瀬日^{いなせひより}和。真琴の母親だ。

肩まで伸びた黒髪と、真琴とは対照的な大きい胸が目立つ。年齢は不詳だが、真琴の年を考えると三十路であることは間違いない。

「あら、楓ちゃん。頭の上にかわいい子猫ちゃんがいるわよー」

「ああ、こいつ？なんか離れないんだよ。頭の上に乗ったまん

ま」

そこまで重くないし、全く動かずに大人しくしているからすっかり存在を忘れていた。

「とにかく、今からご飯の用意をするから」

「よろしくねー楓ちゃん」

「ったく、一児の母なら料理くらい覚えろってんだよな」

「文句言わないのー。せつかくの美貌が台なしよー」

「はいはい、じゃあ親父に風呂掃除するよう言っておいてくれ」

「風呂掃除くらいなら私がやるわー」

そうしてパタパタと風呂場に向かって歩いていくひよ姉。

さっき俺が言った通り、このひよ姉という人物は真琴同様に料理が全く出来ない。

だから、俺が親父が作る夕食を食べに、毎晩決まって親子二人、俺の家に押しかけてくるのだ。

そして、そのついでに風呂にも入っていく。

傍若無人、とはまさにこの事だろう。

ただ、何故か憎めないんだよな、あの人は……。……と。そんな事より、早く飯を作らなきゃな。

「テレレツテツ。神風楓の三十分クッキングー」

「ウニヤー」

今日紹介する料理は、シーフードドリアです。

作り方は簡単。

まずご飯を炊きます。この時、好みによりカスタードクリームを混ぜて炊いて頂いても結構です。

「カエデ、美味いから食ってみろ」

俺は手の平にご飯を乗せ、俺特製のカスタードクリームをたっぷりつけた。

そしてその手を頭上に持っていき、カエデに食べさせる。

パクッ

「フギヤギャッ！」

続いてホワイトソースを作ります。材料は、市販のホワイトソース缶のみ。

そしてホワイトソース缶の中身をボウルに移します。これでホワイトソースの完成です。この時、好みによりホワイトソースにカスタードクリームを混ぜて頂いても結構です。

「ほれカエデ、これ食ってみ」

パクッ

「フギヤアアンッ！！！」

続いて取り出す材料は海老、ホタテ、イカ。あらかじめ海老は殻

を、イカは切ってスジを取って置きます。

「後は全部混ぜチーズを上に乗せて、オーブンでれば出来上がり。この時、好みによりカスタードクリームを混ぜて頂いても・・・」

「・・・消すわよ」

ま、真琴……。来てたのか……。

「カスタードクリームを入れたら消すわよ。それだけは覚えておきなさい」

カスタードクリームを混ぜる際は、真琴が近くに居ないか、充分に確認をしてからお入れ下さい。

「ご飯を食べる時も頭の上に乗ってたわね、その子猫」

「フニャ」

俺達三人は、リビングにあるソファーに腰掛けながら談笑をする。

素っ気なく言う真琴も、頬を少し赤くしながら俺の頭上を見ている。

「いやーん。すっごいかわいいー。私もほしーいー」

と、風呂上がりのひよ姉がキャンキャン言いながらリビングに入

ってきた。

「それじゃあ私が入ってくるね」

「それじゃあ私も真琴ちゃんと一緒にお風呂……」

「消すわよ？」

ボタン

真琴に睨まれた親父はそれ以上何も言えず、ただただ見送る事しかできなかった。

リビングに来たひよ姉は、真琴が座っていた場所に腰掛けた。

「すぐに懷いてくれたんでしょー？いいわねー」

「まあ……悪い気はしないけどな……」

「フハハハハ！畜生を簡単に手なずけてしまうとはな！さすがは私の息子だ！」

立ち直るの早いな、お前。

と。遅れたが一応、説明が必要だろう。

親父の名前は神^{かななぎ}風葵^{あおい}。神風カンパニーの社長で、年齢不詳。それ以外は特に言う事は無い。

「名前は何て言うのかしらー？」

「……」

言っちゃ駄目だ。言ったら絶対に馬鹿にされる。絶対に言っちゃ駄目だ。

「料理作る時に呼んでたわ。カエデって」

さっさと風呂に入ってるよお前は……！！

「自分の名前を付けたのねー。楓ちゃんたら、本当に可愛いんだからー」

「楓の頭にカエデって……プププッ……」

「おい親父、それ以上笑うと……」

「パ、パパが悪かった……プププッ。すまん……プププッ」

ここまで人を殴りたいと思ったのは、久しぶりだった。

「言っておくが、名付けたのは俺じゃないぞ」

「そうだったのー？じゃあ誰が名付けたのかしらー？」

俺は言っのを少し躊躇った。

「……いやっ」

「フニヤ」

とその時、カエデが一度鳴き俺の頭からようやく下りた。

「お、今度は私の頭に乗ったぞ」

親父はとても嬉しそうに、俺達に頭上の猫を見せるようにしてくる。

などと調子に乗っていた親父だったが……。

「フニャ〜」

シャー

「あ、おしっこしてるぞ」

「本当ねー。だから楓ちゃんから下りたのかしらー」

「えっ!?!」

それを聞いた親父は、手をゆっくりと頭にもっていった。

「ンギヤアアアー!!!」

親父の叫び声は商店街にまで響き渡った。

- - - - -

「お邪魔しましたー」

「お邪魔しました」

玄関前。俺達二人は真琴とひよ姉を見送った。

「楓……」

「どうした親父?」

隣の家に帰ろうとする二人の後ろ姿を見ながら、親父は真剣な表情をして呼び掛けてきた。

こんな真剣な表情になる親父も珍しい。

「真琴ちゃん、見る度可愛くなつてないか？なあ、楓？」

「じゃ、俺もう寝るわ。お前はさっさと風邪引いて倒れる」

「フニヤ」

「おいおい、待ってくれよ楓ー」

親父は家の中に入っていく俺の手を掴んできた。

手の平の感触はゴツゴツのザラザラ。とても気持ち悪い。

「楓はそう思わないのか？あんなに可愛くてしっかり者の女の子はそうそう居ないぞ」

「ひよ姉に何を吹き込まれた？」

「今度パパに女の子を紹介してくれる……ゴホンッ！いや、何も言われてないよ」

付き合ってられん。

「俺はもう寝る」

言って俺は親父の手を振りほどいた。
しかし……。

「まだ彼女はお前の事が……」

俺は階段の一段目に足を乗せた所で立ち止まった。

「いや、パパが口出しする事じゃなかったな。すまん、楓」
「それはねえよ」

あいつは違う。

「あいつが付き合ってたのは知ってたんだろ？」

「そう……言ってたな。学園のプリンスと付き合ってたって」

俺は親父を見ずに、階段の先を見つめながら言った。

「そう。真琴はいつまでも引きずるような奴じゃ無いって事。それに何年前の話だと思ってるんだよ」

「……そうか。ただな、楓……」

俺は階段に向けていた視線を、ゆっくりと親父に移した。

親父はその整った容姿を一切動かさずに、ただ俺をじっと見つめていた。

「日和さんはな、学園のプリンスと付き合っている事を聞いて、外面嬉しそうにしてたよな？」

「ああ、家に呼びまくって赤飯食べさせまくってたな」

その赤飯はもちろん俺が作ったんだけど。

「だけどな、内面は本当に残念そうにしてたんだぞ。知ってるか？」

んっ！？

「あの人は真琴を玉の輿に乗せたいんじゃないのか？」

「その様子だと、気付いていなかったみたいだな」

「いや、知らなかった。けど、それがどうしたんだよ……」

親父はニツコリと笑った。

「自分に自信を持て。お前はそれだけ魅力のある男だ」

時折見せる真面目な表情。

普段阿保な人間だけに、こういう時はかっこよく見える。

「……そっか」

「ああ。だからこそ俺はお前を迎え入れたんだからな」
「ああ」

俺も親父につられて笑う。
不思議と嫌な気はしなかった。

「おやすみ、楓」

「ああ。おやすみ親父」

親父はションベン臭かったが、口にはしなかった。

Ep3：聖蘭の空模様

「で、手伝いつて何すりゃいいんだ？」

「はい、この資料を……」

ドーン……！

机が壊れるんじゃないか、というくらいの量の紙が机の上に置かれる。

机は金属ながらも、今すぐにも壊れてしまいそうな程になっていて、その積まれた用紙がいかに重いかを物語っている。

時雨はその積まれた用紙の横から、ひょっこりと顔を出した。

「この生徒会室から、職員室へと運ばなければいけないんですよ」
「まじかよ……。ていうかよく持ち上げられたな、それを」

その資料というやつは、少なくとも一メートル以上積まれていた。時雨はとても細い腕なのに、よくそれを持ち上げられたと思う。そんな力、どこから出ているのだろうか。

胸？

阿保か俺は。

「実は私、他にやらなきゃいけない事がありまして……。申し訳ないんですけど……」

時雨は本当に申し訳なさそうに、もじもじしながら俺の顔色を伺い言う。

ニコニコする時雨も可愛いが、親に怒られた子供のような表情をする時雨も、これもまたとても可愛い。

「……分かったよ。これを全部運べばいいんだろ？」

「わっ。さすが楓さまです」

時雨は俺の右手を両手で掴んで、ぶるんぶるんと大きく上下に動かし、感謝の意を表現してきた。

ゆで卵みたいなスベスベの柔らかい手は、触っただけで天国を味わったような。とても気持ちのいい感触だった。

「このお礼は後でたっぷりとさせてもらいますから、それではよろしくお願いしますね」

ボタン

時雨は挨拶もそこそこに、いそいそと生徒会室から出ていった。

時雨の言うたっぷりのお礼って何だろう。

ひざ枕から耳かきのスーパーコンボ？

それとも、背中を流してくれるお色気サービス？
それともそれとも……。

「一夜のアバンチュール……」

一夜のアバンチュール……一夜のアバンチュール……一夜のアバンチュール……。

俺の脳内に、エコーがかかる。

一夜のアバンチュール。その単語は俺を俄然やる気にした。

「いよっしゃあー！ やったるぜえー！」

今こそ燃え上がれ、俺のソウル！！！ 韓国の首都じゃなくて、魂の方のソウル！！！！

俺の両腕よ！ 今こそその力を解放たん！！！！
いくぞー！！！！ ぬおおおー！！！！

「あつ！ 腰つ！」

机の上に積まれた大量の紙は、魚籠ともしなかった。
それどころか逆に俺の腰を破壊しようとして試みってくる。

「何回かに分けるしか無いか……。あつ腰がつ……………」

生徒会室と職員室の距離ってかなりあるんだよなあ……。広すぎる学校つても考え物だよなぁ…………。

結局俺は、用紙をおよそ三十センチづつ、三回に分けて運ぶことにした。

俺は三つに分けた用紙の内の一つを抱え、生徒会室の扉を開き廊下に出る。

今は昼休み。

ある程度の雲は出てきたものの、今日も清々しい晴天だった。

中庭では可憐なお嬢様達が優雅に食事を楽しみ、その姿には思わずとも目を奪われてしまう。

そしてそんな中、俺は昨日時雨に言われた通り、時雨の手伝いを
すべく生徒会室に向かったのだ。

が、その結果がこれ。まさか本当にこき使われるとは思っても
なかった。

それにしても花音が隣に居ないことが気にかかる。

まあ、とりあえず今は余計な事を考えてないで、さっさと運ぶか。
それにしても、時雨のお礼ねえ……。

「一夜のアバンチュール……一夜のアバンチュール……一夜のアバ
ンチュール……」

うわっ……。ついに幻聴まで聞こえてきた……。

確かに俺はチェリーボーイだけど、そんな幻聴が聞こえてくる程
に欲求不満だとは思って無かった……。

「真琴ちゃんと一夜のアバンチュール……真琴ちゃんと一夜のアバ
ンチュール……」

ま、真琴と……？ 時雨とじゃなくてか……？

っーかこの幻聴の声、どこかで聞いた事あるぞ。

「最終的にはパパと一夜のアバンチュール……」

「仕事しろやああー！！！！」

ロベカル顔負けのキックじゃーい！！！！

「パパは楓なら何時でもオツケーだからねー！」

キラーン

俺の一蹴りで、親父は再び星になった。

親父と一夜のアバンチュール……。

その光景を想像してみると、テンションが下がったところか吐き気もしてきた。

……とっとと運ばないと昼休みが終わっちゃうな。

そう俺は気持ちを切り替え、再び職員室に向かって歩き出した。

廊下を歩いていると、不意にカエデが俺の肩から下りる。

そして俺の体をするすると伝い、積み上がっている紙の中からてっぺんにあった一枚をくわえた。

紙をくわえたカエデは、積まれた紙の上から廊下へと飛び降り、そのまま俺と並ぶようにして歩き出した。

「お前も運んでくれるのか？」

「ニヤン」

畜生は嫌いだが、こいつだったらまあ悪くないかな。俺は何と無

くそんな気持ちになってきた。

大事な資料を汚す訳にもいかない為、俺はカエデに用紙を返すよ
う言う。返してもらったそれは元の場所に戻した。

紙を返したカエデは再び俺の肩に乗り、俺の肩を温める。

「あー！やっと見つけたー！」

ん？

廊下を歩く俺の後方からから、煩い声が聞こえてくる。

「ん、つばさか」

「やつほ……きゃああー！」

ベースが無いのに、見事なヘッドスライディング。

「どうして何も無いのにコケるんだよ」

「えへへ……」

振り向いた先に居たのは天堂つばさ。俺とカエデを巡り会わせた
張本人だった。

つばさは照れ笑いをしながら制服に付いた埃を手で払う。

「カエデ」

ニコニコしながら肩上のカエデを撫で、カエデも気持ち良さそう
に目を細める。

「ねえ、楓君」

「俺か？」

「うん。私の知ってる楓君はキミしかいないよっ」

肩の上という身近な場所に居る訳だが……。

「君を付けたら俺なんだな？」

「うん」

よし、やっと理解した。

「で、何だ？」

「えへへ。じ、っ、は、ね」

つばさニヤニヤしながら言い、そして手を上着のポケットに突っ込む。

しかし、ポケットに手をつ込んだ瞬間つばさの手は止まり、みるみる内に顔から血の気が引いていく。

そう、それはまるでもうすぐで小便が漏れそうな人の様に。

つばさはポケット内に入れた手をもぞもぞ動かし、そして最終的にはポケットの中を覗いた。

「あはっ、あはははは」

そしてつばさは意味も無く愛想笑いを浮かべる。

そう、それは小便が漏れそうな状態で、友人から話し掛けられた時の様に。

「あははは。実はね、楓君」

「ああ。どうしたんださっきから様子がおかしいが……」

つばさはえー、あー、と言いながら、何とかその先の言葉を出そうとする。

「だから何だよ」

「えっと……ね、私、買ってきたの……」

「買ってきた？何をだ？」

そういえば俺を見つけた時も、探してた。みたいな事を言っていた気がする。だとすると、つばさは俺の為に何かを買ってきたって事か。

それならどうして……。

「はい。今、ちまた巷で噂の潰れクリームパン」

そう言つてつばさがポケットから出したのは、俺が昨日潰してしまったクリームパンと同じ、『ふんわりやわらかカスタードクリームパン』だった。

しかも当時の状態がうまく再現されている。

「おい、潰れたクリームパンなんて聞いた事ないぞ」

「あれ、おかしいなー？ 一年生はこの噂で持ち切りなんだけどなー？ 二年生って流行に鈍感なんだねー」

などと、所々声を裏返しながら言う。

と、一年生らしき少女が俺達の横を通り掛かった。とても大人し

そうに見える少女だ。

俺はその少女に真偽を確かめることにした。

「その君」

「はい……？」

「潰れクリームパンってのを知ってるか？」

「潰れ……クリームパン……ですか……？」

「そう。これだよ」

少女はとてもか細い声で返事をしてくて、俺の予想通り、物静かそうな印象を受けた。

そうして俺はそのブツを少女に見せる。

「うわー。マジキモいんですけどー」

性格が……変わった？

「そ、そうか。急にキモい物を見せて悪かったな」

「いえ……。では……」

少女は別れを告げ、そして再び廊下を歩き出していった。

「ごめんね、楓君。パン潰しちゃって……」

「いや、気にすんなよ。気持ちだけでも嬉しいから」

俺はニコツと笑いかけながらつばさの頭にポンツ、と手を置いた。人差し指の先っぱが大きなリボンに触れる。

大きなリボン……。

同じ色、同じ大きさ……。

それは例え体が成長しても、変わる事のない……。

彼女の証……。

「まっ、とにかくありがとうな」

「うん。結局潰しちゃったりして……ごめんね、楓君」

「いや、その気持ちだけで嬉しいって言ったろ？」

「うん。ありがとう」

つばさはようやく、何の陰りも無い笑顔になってくれた。

そして俺は手に持っている潰れクリームパンを、上着のポケットに仕舞った。

「じゃっ、俺仕事があるから」

「うん、頑張つてね」

俺達は笑顔で挨拶しながら分かれた。

四階の生徒会室と一階の職員室を行ったり来たりするのには、本当に参ってしまった。

久しぶりに力仕事をした為に、悲鳴をあげる全身。腕も勿論そうなのだが、特に腰が悲鳴をあげている。

「ギャオー……」

「神風さん、御乱心ですか……？」

それは放課後になっても治らず、この程度の力仕事でここまで動けなくなるとは思わなかった。

まあ、それは当たり前と言えは当たり前かと思う。高校に入ってから運動をしてこなかった俺に対する警告みたいな物だろう。

とか言って気を紛らわせるものの、体のあちこちがミシミシと軋きしんでしまっていて、歩くのもやつとの体だ。

図書委員は座るのが仕事。それが唯一の救いだった。

「綺麗な夕焼けですね……」

咲蘭が貸出、返却カウンターの席から窓の外を眺め、言う。

俺もそれにつられて窓の外を見た。

その窓からは噴水広場。その広場の中心にある噴水が左斜め前に有り、そしてそこから視点を少し右に移すと校門が見える。

俺は立ち上がって窓の側まで行き、それを開けた。

春の風が優しく吹く。

オレンジの光に照らされた噴水はキラキラと輝き、水同士がぶつかる音とその光景が相重なる。

なんだか自分一人、違う世界に招待されかのような感覚を覚えてしまう。

「時雨……？」

噴水に向かって歩く時雨が、校門の左に見える噴水の、さらに左の視界に入ってきた。

今俺が居る図書室の左側にある昇降口。時雨はそこから出てきて噴水に向かって歩くと、その前で立ち止まった。

誰かを待っているのだろうか。それ以前に、花音はどこに行ったんだろうか……。

様々な疑問が俺の脳を掻き回す。そんな時咲蘭が立ち上がり、俺の隣に並んだ。そして彼女は俺と同じ方向を眺める。

「生徒会長ですね……」

「ああ。それにしても、何をやってるんだろうな」

花音でも待っているのだろうか。迎えの車を待っているのだろうか。校門の方向を向いたままの時雨の表情は見えない。

「多分、副会長を待っているのではないでしょう……」

「副会長を？」

花音、もしくは迎えを待っていると予想していた俺は、咲蘭に思わず聞き返してしまった。

しかし副会長を待つなんて、生徒会の仕事をやる為に待っているとかだろうか。

いや、それなら噴水前で待ち合わせするってのは不自然……じゃないか。

「会長と副会長は付き合っているそうですから……」
「ふん。カップルなんだ」

「つて、えええええー！！！」

商店街にまで届くかのような叫び声が、学園内にこだまする。

「知らなかったのですか……？」

「あ、ああ。驚き桃の木だ」

咲蘭はさも知ってて当然のように言ってきた。

でも確かに、知ってて当然なのかもしれない……。

あの時雨が誰かと付き合うという時点で話題になる事間違いないのに、その相手が会長を補佐する、副会長なのだから。話題性は充分すぎる程有る。

「何で知らなかったんだろうね、俺は」

「あまり、他人に興味が湧かないからではないでしょうか……」
「ぐう……」

ぐうの音は出たものの、何も言い返すことが出来ない。
言われてみれば、思い当たる節があった。

咲蘭の事だっけそう。ザマス斉藤は、あたかも全員が咲蘭を理事

長の娘と知っているかのように言った。しかし、俺は知らなかった。

「でも、興味を持った物に対してはとことん興味を持つ人だと思います……」

「そ、そうか？」

褒められているのかどうかは分からないが、なんだか嬉しくなる。俺は単純なのだろうか。

そして咲蘭は窓の淵に手を添える。

「真琴さんと接する神風さんを見ていたらそう思いました……」

「真琴と？」

「はい、何となく……」

「何となくか……」

でも、言われてみればそうかもしれない。俺達はまるで磁石の様に、いつも一緒に過ごしてきた。

俺が真琴の側に居るようになったのはいつからだったか……。

所々しか浮かび上がらない俺の幼稚園生活。そこに真琴も、ちらほらと出演している気がする。

確証は無い。幼稚園時代の話だ。そんな鮮明に覚えている筈が無い。

「俺、嬉しかったんだよ」

「何がです……？」

真琴の事を考えていると、急に頭に浮かんできた。

「真琴がいい人と付き合ってくれてさ」

咲蘭は返事も何もせず、じっと黙って俺の話を聞こうとしてくれている。

「娘を送り出した父親みたいになって、慎吾に言われた」

「そうですね……」

「本当に嬉しかったんだよ。真琴がいい女の子だって認められた気がしてさ」

だからなのかもしれない。

有頂天になって、周りが見えてなかったのかもかもしれない。

「だからついやってたんだよ……。どうしても許せなかったんだよ……。周りの事も気にならないくらい許せなかったんだよ……」

腹が立ったから殴ったんだろう。
その通りだ。

こんな暴力を振るう生徒は退学にしろ。

ああ、俺があんたらの立場なら絶対にそう言うよ。

理事長、何故退学処分を下さないのですか。
そりゃそう言われるだろうよ、理事長さん。

だから、これだけはどうしても聞いておきたかった事がある。

「どうして俺を残すように言った？」

俺とお前は一度も話したことが無いどころか、対面した事も無い。見ず知らずの他人を、どうして庇うような真似をしたんだ。

「私も神風さんと同じなのかもしれません……」

娘に言われて。

これは理事長がこぼした一言、失言だ。

他の人は聞いていなかったかもしれないが、俺の耳にはちゃんと聞こえていた。

「親バカでしょう……?」

「……そうだな。稀に見ない親バカだぞ、それは」

でもそのお陰で俺は色々な人と出会えたし、世の中とは、意外にも都合よくいくものだなと感じた。

「神風さん、あれ……」

と、咲蘭が噴水の方を指差し言う。俺はその先を見てみた。

「あれが副会長か」

咲蘭が指差した先には、身長百八十センチはゆうに越えるであろう、とてもスマートな男が、時雨の正面に立って話していた。

校門側を見ているので、その男の顔は分からない。

「成績優秀、美男子、剣道全国優勝……。家は鳳仙院グループ以上の財閥です……」

「そりゃすごいな」

飛鳥のグループがどれ程の物か分からないから比べようが無いが、多分相当巨大な財閥なのだろう。

「理想的な男女……」

「そうだな。時雨程の美人に……」

釣り合う男はそれくらいなもんだろ。そう言おうとした。

しかし咲蘭がそれを遮るようにして言ってきた。

「には見えないです……」

「えっ？」

聞き間違いだろうか。

俺の言葉を遮るようにして言った咲蘭の言葉はまた予想外で。俺は先程の様に聞き返してしまった。

「……いえ、気にしないで下さい……」

咲蘭は言いながら窓を離れ、再び例の席に座った。

俺は咲蘭の言った意味が気になったが、聞くのを躊躇ってしまっ

とても今の意味が気になる。

これもやはり、俺が時雨に興味を持ち始めているからなのだろうか。

止めとこつ。

今の俺が聞いているいい様な事じゃない。何と無くそんな気がした。

E p 3 : 聖蘭の空模様（後書き）

ロベカル：ブラジル代表の有名なサッカー選手、ロベルトカルロス
選手の事です。

Ep4：慎吾が好きな○○

「一致団結ですわっ！」

バーン！

大きな声と共に、白いチョークで春蘭祭しゅらんさいと書かれている黒板を叩く。その飛鳥に叩かれた蘭の文字はすこし霞んでしまった。

そして春蘭祭の隣に書いてある、お化け屋敷。という文字が、黄色く大きい丸に囲まれている。

四月も下旬。外では花粉を運ぶ春風が、クラス内では緊張を運ぶ春風が吹き渡る。黒板の上の壁に立て掛けられた時計だけが、その静寂に抵抗するような態度を示していた。

クラスメイトは黒板と、その前に立っている飛鳥を黙って見つめたまま、誰ひとり口を開かない。

今なら、ゴキブリやクモ。はたまた忍者の足音でさえ聞き取れるであろう教室内。

「ぐおおー。ぐおおー」

俺の前に座る人物のいびきが耳障りで仕方ないのだ。

「一人だけ、クラスの団結を乱そうとしている人がいますが、皆さ

んは気にしないで下さいね」

と言いつつも、飛鳥はこいつのいびきに相当苛々しているらしく、眉間をピクピク動かし、親指と人差し指に挟むチョークをパリーンと砕いた。

そして自身の砕いたチョークを拾う光景が、クラス中に更なる緊張を与える。

そこで俺は、たまにはクラスに貢献しようと考えた。

「おい、慎吾。起きろよ」

「ぐおおおゝ。ぐおおおゝ」

俺は慎吾の背中を揺する。しかし、起きる気配を全く見せないどころか、いびきの音量が大きくなった。

「起きませんね……」

「ああ、それどころかいびきの音量が大きくなったな」

春蘭祭。

春に行われる聖蘭学園の文化祭を俺達は春蘭祭と言う。春と言っても開催は5月の下旬なので、夏に近い。

そして開催までまだ一月以上ある今日のホームルームの時間を使い、文化祭の出し物を決めようとの事だ。

聖蘭学園には、危険だからという理由で体育祭が無い。そのためこの文化祭は学園にとってビジネス面から、とても重要な行事だったりもする。

まあ俺達生徒は理事長のそんな不安もいざ知らず、自分達のやりたいようにやっている訳で。

「仕方ないな。絶対に起きるアレ、やるか」

「アレ、ですか……？」

「ああ。まあ見てなつて」

俺は椅子から立ち上がり、机から身を乗り出した。そしてそのまま顔を慎吾の耳元に近付け、慎吾にしか聞こえない音量でそつと囁く。

「おい慎吾、等身大真琴ちゃん人形が欲しくないか？」

「マジっすかー！？ それってもしかしてダッチ……」

「あああー！！！！ それ以上は言うんじゃねえー！！！！」

慎吾はまるで早押し問題のボタンを押した時みたくピンポーンと

顔を上げ、そしてとても口にはできないあの言葉を言おうとする。
俺が止めていなかったら社会問題にまで発展していた。

「どこ！？ その人形どこ！？」

慎吾は右手を敬礼の状態にして、キョロキョロと辺りを伺う。

「あれだ。お前だけの真琴ちゃん等身大人形」

俺は寝起きのテンションとは思えない慎吾の肩を叩いて、左斜め前の窓際の席に座る、等身大真琴ちゃん人形を指差し言った。

「うつわー！ 肌の色とか体型とか眠そうな表情とか。本物そっくりじゃん！」

「ああ。リアルさを追求してみた」

「すっげーよ楓！ お前マジすっげーよ！」

「ははっ、やめろよ慎吾。背中が痒いぜ。そんじゃ早速、抱き着いてきたらどうだ？」

「いいのか？ 俺が真琴ちゃんダッチ……人形に抱き着いてもいいのか？ クラスの奴らは何も言わないのか？」

「ああ。みんな言葉を失うと思う」

「そっかそっかー！　じゃあ早速抱き着いてチュッチュしてくるよー！」

「ああ。思う存分抱き着いてチュッチュしてこい。ただし治療費は負担しないからな」

今日は文化祭委員の三岸が病欠で学園を休んでいるため、この場を仕切っているのは文化祭委員じゃなく、学級委員である飛鳥だ。飛鳥が仕切った事で、話し合いをスムーズに行う事が出来たという事実もあるし、飛鳥が仕切ったのは結果として良かったのかもしれない。しかし、一応三岸の相棒となる男子の文化祭委員も居るには居るのだが……。

「真琴ちゃん！」

「キャー！！！」

その文化祭委員は、数分後に再起不能になるだろうな。うん、まあ能無し法一の事は放っておいてこつ。

飛鳥が三岸の代打でクラスを仕切り、そしてその飛鳥を中心に話し合った結果、喫茶店やパン屋等の意見も出ていたが、結局俺達はお化け屋敷で満場一致した。

「この人形、本物みたいに柔らかいなあ」

お化け屋敷。それは非現実的な状況を体験できる空間。

入場した人間は数分間空想の世界を体験する事ができる、言わば現実とは隔離された世界。それがお化け屋敷だ。

それが人間、もしくは作り物だと分かっている、人々は驚き、恐怖し、思わず声をあげてしまう。

そして恐怖は文字通り、恐れ怖れる感情なのだが、人々はその恐怖を恐れ怖れずに、その非現実的空間に身を投じている。

そんな矛盾が、このお化け屋敷という物の面白い所でもある。

「小さい胸までリアルに再現できてるんだな」

モミモミモミモミ

「……っ！……！」

変態は等身大真琴ちゃん人形が座る席の隣にしゃがんで、モミモミしていた。

等身大真琴ちゃん人形が握り締めた右手の拳が、真っ赤に燃え上がっている。

「……ねえ、慎吾」

「うおっ！ この人形喋るのかよ！？ リアルなプレイが可能つか！？」

変態はますます興奮し、鼻息をフゴフゴいわせている。

そんな変態を見ている、飛鳥を含むクラスメイトは、全員合掌をしていた。

「慎吾、一つだけ聞いていいかしら？」

「うんっ！ 何でも聞いてくれよ！」

「私は何？」

「私は何って、そんなの喋るダッチワ……」

「消えて無くなれええー！！！！」

出たアアア！ 真琴の必殺、ローリングサンダーカミカゼストームッ！！！！

ローリングサンダーカミカゼストーム。そのあまりの威力とキレのよさに必殺技として扱われる、ただのアップーカットだ。

真琴ちゃん人形もとい、真琴のアップーが見事にクリーンヒット

した慎吾は、頭頂部を天井に思いきり打ち付け、そして重力によって床にたたき付けられた。

「胸まで似てるですって？」

「え！？ え！？ 胸だけじゃなくて、暴力的な部分までリアルに再現してんのかよ！？」

「消えるオオオー！！！」

出たアアアー！！！！ 真琴の必殺、ファイナルエターナルローリングサンダーカミカゼストームツ！！！！

ファイナルエターナルローリングサンダーカミカゼストーム。それは目にも留まらぬ足使いで相手のみぞおちを何度も蹴りつける、極悪非道の技だ。

ちなみにファイナルエターナルとは、蹴り終わった後の痛みが延々とその人を苦しめる所から名付けた。

慎吾はゴフゴフ言いながら、床にのたうちまわる。クラスメイトは大合掌。

「吹っ飛べー！！！！」

出たアアアー！！！！ 真琴の最後にして最強の必殺技、ゼロエターナル！！！！

ゼロエターナル。ただ相手を蹴るだけなのだが、そのあまりの飛距離に、カッコイイ名前が付いてしまった。

「本物みたいなキックだぜええー！！！」

真琴のゼロエターナルを受けた慎吾はそう言い残し、春の青空に消えていった。

クラスメイト全員で大合掌。

「さて、邪魔者が消えた所で話を続けますわ」

飛鳥は何事も無かったかのように振る舞うが、心の中では真琴に恐怖しているだろう。

目の前で行われたのは喧嘩じゃない。殺しだ。さすがに高校生にあの光景はショッキング過ぎる。

ガラガラ

と、このタイミングで教室の前方の扉が開いた。

「おい、楓！ リアルに再現し過ぎだぞ、あの等身大真琴ちゃん人形！」

お前かよ！……！　　っーかいい加減本物だつて事に気付けよ！……！

「つて待てよ……！……！　　よく考えたら本物じゃねーか！　　騙したな、楓！」

このタイミングで気付くのかよ！？

「つたく……。折角の昼寝を邪魔した揚句、その混乱に乗じて殺す気かよ……！」

などとぶつぶつ言いながら慎吾は席に着いた。
そして席に着くと同時に――。

「ぐおおお……。ぐおおお……」

こいつ……。

「慎吾、真琴のレオタード写真をあげようか？」

「それならもう部屋に沢山貼つてある」

真琴という三文字を聞き取ると、とりあえず目は覚めるみたいだ

った。

そういえばこいつの部屋に遊びに行った時、真琴のレオタード姿の写真が壁に貼ってあったのを思い出した。

「それにお前が真琴ちゃんのレオタード姿の写真を持っている筈無いだろうが」

「そっぴやそうだった……。バスタオルを体に巻き付ける真琴の写真なら持つてるんだけどな……」

それを聞いた慎吾はすかさず目をキラキラさせ、両手で俺の両肩をポンと叩いた。

とても分かりやすい人間だ。

「くれ。それを俺にくれ」

「おいおい、頼み方って物があるんじゃないのか？」

「あんた急に態度デカくなりましたね！ 人間性を疑うよ！？」

「おっ？ 嫌ならあげなくてもいいんだぞ？」

「くっ……………分かったよ。何をすればいいんだ？」

慎吾は唇を噛み締めながら言った。

どうやら慎吾は、プライドを捨ててまで真琴の写真を手に入れた

いみたいだ。

慎吾はクラスで最もストーカーに近い存在である。

「流石ミジンコ以下のプライドを持つ男だ。よし、だったら三回」

「あんた言葉を選ぶという作業はしないんっすかね!？」

「うるさいミドリムシだな。あげなくてもいいんだぞ?」

「すみません! 私めが調子に乗っていました!」

「ああ。お前はすぐに調子に乗るゾウリムシだ。分かったな?」

「は……はい……。私はすぐ調子に乗るゾウリムシです……」

慎吾は土下座をしながら言った。

その光景を見つめる俺は、俺の中の何かが目覚めそうな、そんな感覚に襲われた。

「そうだ。お前は薄汚いアオミドロだ」

「はい、私は薄汚いアオミドロでございます」

「うふふふ……。この感覚……。この感覚こそ俺が求めていた物だ……」。

「よし、今からお前に口ウソクを垂らすぞ」

「それちよつと方向性おかしくないっすか！！！！ 完全に目的変わってるんですけど！！！！」

「なら靴を舐めろ」

「今の俺の話聞いてないでしょ！？ ねえ、楓さん！？」

「なら、私は薄汚い黒豚です。靴を舐めますから、口ウソクを垂らして下さい。と言え」

「靴を舐めても、結局は口ウソク垂らされるんですかね！」

……………。

「え？」

「補聴器買ってきてあげましょうか！？」

と、さっきからツッコミばかりしているミカヅキモ以下のプライドを持つ慎吾が、そのままの勢いで態度が大きくなってくる。

俺はケセランパサランの反乱に憤りを感じたが、それと同時にあの事を思い出した。

「あつ……」

「どうした楓？」

俺が忘れていた事は当たり前前で、それでいて一番厄介な事だった。

「そういえば、その写真は真琴に取られたんだ……」

「ギヤアアアー！！！！」

Ep5: 変わるもの、変わらないもの

「よし、真琴ちゃんの部屋に潜入しよう」

慎吾の残念な脳みそが判断した結果、こうなりました。

「お前、本気がよ……」

「本気さ。とらあなに入らずんばこじを得ずってやつだよ」

なぜ虎児が読めて虎穴が読めないんだよ……。

俺は今、慎吾が住むアパートにいる。場所は学校から近く、慎吾はここで一人暮らしをしながら学校へと通う毎日を送っている。

六畳ワンルームの部屋には、カップ麺の箱や割り箸、ファッシュン雑誌や週刊誌などのゴミがワンルームの部屋に所狭しと散乱している。

そんな場所でも、暇な時間をここで潰してばかりの俺。ゴミだらけの部屋の居心地が良く感じてしまうのだから、我ながら困ってしまう。

で、例の慎吾は、真琴のプロマイドのありかを聞いてからというもの、ありとあらゆる表情を浮かべながら、妄想を膨らませているようだ。

「やめとけ。いまならただの変態で済む」

「今ならただの変態って、もし僕が真琴ちゃんの家に入ったらどうなるの？」

俺はベッドに座っている慎吾の目を見ながら、真剣な表情で告げた。

「あの真琴だぞ？ バレたらどうすると思う？」

「……」

慎吾は無言のまま俺を見つめ返してくる。

「お前は屍になるな」

「やめとくよ」

「ああ、そうしとけ。そうやって妄想に浸っているだけで何もしない、ヘタレ人間でいるのが賢い」

「だからあんたは言葉を選ぶって事をしないんですかね！？」

クラスの出し物はお化け屋敷に決まった。

文化祭でお化け屋敷を出展する。という目標に向けて一致団結を

する。汗水流し、お互いに意見をぶつけ合い、衝突し、仲直りして。これぞまさに青春だ。

「なあ、お前は文化祭出るのか？」

俺はふと慎吾に聞いてみる。

俺にそう聞かれた慎吾は、馬鹿馬鹿しいといった表情で俺を見てきた。

「あんな馬鹿馬鹿しい行事になんか出ないよ。その日は家で寝てる」

「そのまま永眠……と」

「不吉な事言わないでくれますか!!!!」

俺は読んでいた雑誌を小さいちゃぶ台の上に置いて、立ち上がった。

「そつか。んじゃ、そろそろ帰るわ」

「ああ。じゃあね」

部屋のドアノブに手をかけた所で後ろに振り向く。

「慎吾……」

「ん、何？」

「明日こそ学校来いよ……」

「ほぼ毎日行ってますけど……!」

ガチャッ。

俺は部屋から出、扉を閉めた。それと同時に春風が花の匂いを俺の鼻に運ぶ。

アパートは特に、古いと言う訳では無いが、新しいと言う程でもない、いたって普通のアパートだ。

慎吾は中部からエスカレーター方式で高校に上がってきた。中部は高等部の隣にあつて、慎吾は中学生の時からあのアパートに住んでいるらしい。

慎吾の中部時代は、当時、公立高校に通っていた姉と、二人暮らしをしていた。二人は調度三年違いなので、姉が高校を卒業すると同時に慎吾も中部を卒業した事になる。

高校を卒業した姉は、この町の会社に就職した。そうして、いい機会だからと言い、慎吾の姉は今まで二人で生活していたアパートを出ていったそうだ。

「あの〜」

そういえば俺、慎吾の姉を一度も見た事無い。
慎吾からの話でしか知らないから、それ以上の事は何もわからない。
い。

「あの〜」

だが、あの慎吾の姉だ。

『はじめまして、わ……私が……慎吾の……姉………エへへへへ
へ……ジュルッ。私、土器を見るとよだれが止まらないんですよ……
…ハアハア………』

みたいな。

いずれにしろ、期待はできないな。そもそも人間じゃないかもしれないし。
れないし。

「あの〜、よだれが垂れてますよ?」

「エへへへへ……俺、土器を見るとよだれが止まらないんですよね
……ジュルッ」

「そうなんですか? とても珍しい方ですねっ」

ん、今俺に話かけてる、目の前で笑っているのは誰だ?

「ていうか、あなたは？」

「やっと私に気付いてくれましたっ」

アーケード街を通る俺に話し掛けていたのは、二十代前半くらいの女性だった。

長く茶色のかかった髪を後で一つに纏め、おおきい二重の目、白くてつやつやの肌、何物をも包み込んでくれそうな、美しい顔がそこにあった。

にしても、どこかで見た事があるような無いような……。もちろん初対面だが……。

「あの、スボンのチャックが開いてますよ？」

「えっ？」

俺はスボンのチャックが開いているかどうか確かめると同時に、スボンのチャックを上げた。

高校二年生にもなって、何やってんだか……。

「で、俺に何か用があつたんじゃないんですか？」

「はい、チャックが開いているのに気付いていないようでしたので」

その女性は、右手に買い物かごを持ちながら、にっこりと天使のような笑みを浮かべる。

服装もエプロン姿だし。この女性は主婦、というやつだろうか。というか、用ってもしかしてそれだけか？

「では、私は買い物途中ですのでっ」

「ああ……はい。わざわざありがとうございます……」

「困った時はお互い様ですよ。では、さようなら」

どうやら用は本当にそれだけらしく、そのままのニコニコ顔で去っていった。

それにしても、今思うと、とても綺麗な人だった。

エプロンを付けながらの買い物だったし、多分、配偶者はいるだろうけど……。

まあ、近所に住んでいる事は確かだし、また会った時に聞いてみるか。

「ねえ楓、今誰と話してたの？」

「んあ！？ ああ……、真琴か……。部活終わったのか？」

アーケード街で立ち尽くしていると、不意に後ろから話し掛けら

る。振り向くと、そこには真琴と、彼女の友人二人。三人がそこに居た。

「えっと……。秋谷と、菅原だったか？」
あきたに　すがわら

「は、はい……。秋谷です……」
「菅原です……」

名前は当たっていたのだが、二人はおどおどしながら、上目使いでこっちを見ながら答える。

「ねえ、真琴……。すっごい恐いんだけど……ヒソヒソ」

秋谷さんはとても正直で、尚且つ、声が大きな人だった。

「じゃあ私達はこっちだから、じゃあまた明日ね。……ほら、アッキー、行くよ？」

「う、うん。じゃあまた明日ね」

「じ、じゃあね、アッキー、すがちゃん……」

菅原が秋谷の手を引き、そのままアーケード街の向こうへと行ってしまった。

「あんたが今まで積み重ねてきた結果よ」

「……ぐっ」

「これが嫌なら授業をサボったり、途中で抜け出したり、遅刻したりするのを止めるべきね」

「……ぐっ」

とりあえず、ぐっの音は出しておくべきだと思った。

「まあいいわ。せっかく会ったんだから、何か食べてかない？ 私、甘いもの食べなくなっちゃった」

「……俺のおごりか？」

「あつたりまえじゃない」

真琴はゲラゲラ笑いながら俺の肩をバシバシ叩いてきた。

「あのな、たまにはお前がおごってくれとか無いのか！？」

「うん。もちろん無いわよ」

くわああ……。何てやつだ。

どうして俺はこんな奴と知り合ってしまったんだ……。

「ほらほら、行くわよ」

俺は真琴に手首を掴まれ、そのままアーケード街にある、ファミレスに無理矢理連れて行かされた。

女の子に手を引かれる俺。主婦だったり、下校途中の学生だったり。その光景を見た人達は俺の事をクスクスと笑う。

尻に敷かれている彼氏。とても見られたのだろうか。

まあ、それに近いものはあるが……。

「違うのは彼氏じゃ無いって事くらいか……」

「えっ？ 何か言った？」

「……いや、何でもねーよ。それより早く食わないと溶けるぞ」

「……言われなくても分かってるわよ」

言って真琴は、再びパフェ崩しに取り掛かる。

俺は無駄金を使いたくなかったので、コーヒ一杯しか注文しなかったが、真琴は容赦無く、二千円オーバーの超ビッグパフェ注文するという暴挙に出た。

「何見てんのよ？」

「んな食つてると太……」

「……殴りたいの？」

満面の笑み。

「すいませんでした……」

それが逆に恐かった。

「で。さっき、違うのは彼氏だけか……。とか言っただけ？」

「いや、そんな事は言っていない。聞き違いだろ」

「このバニラアイスの部分、一口あげるから」

「ああ、俺は確かに間違はなく、違うのは彼氏じゃ無いって事くらいか……。って言ったぞ。……って、俺の金で買ったパフェじゃねえかああー！！！！」

「あんたも馬鹿ねえ」

真琴は可哀相な物を見る目で、俺を見、口の端を少し吊り上げ、鼻で笑った。

とても憎たらしい顔だった。

「で、何が、違うのは彼氏じゃ無いって事くらいか……、なの？」

「……何でもない」

特に隠しておきたい事ではなかったが、あまり言いたくない事であるのは確かだった。

言ったところで、ふーん。としか返ってこないような気もする。

とにかく、これは口が裂けない限り言わないだろう。

「コーンフレーク付けてあげるから」

「さっき真琴に手を引かれた時、周りの人達に、尻に敷かれる彼氏。っていう感じで笑われたからさ。違うのは彼氏じゃ無い……って俺は馬鹿だああー！！！！」

俺は椅子から降り、頭を抱えながら床をゴロゴロのたうちまわる。

さすがに恥ずかしかったので、数秒ゴロゴロしてから、制服に付いたホコリを払い、再び真琴の正面の席に座った。

「あんたは……」

真琴がボソツと言う。

「今、私とどういう関係だと思っ？」

今度は俺の目をしっかりと見据え、言ってきた。

「……幼なじみ……かな？」

「他には？」

他には……ねえ。

「気の合う友達、かな」

「……」

何か気の触る事でも言ったのだろうか。真琴の顔は先程のそれとは違って、えらく真剣だった。

「私もそう思ってた……でもね……」

「男と女の友情なんて、成り立たないのよ」

「……？」

「だから私達は同性同士で友情を育むの」

「だったら俺達はどうなんだ？」

「言ったでしょ。男と女の友情なんてのは成り立たない。って」

真琴が何を言いたいのか、よく理解できない。

ただ、俺の心の中に何かのしかかる感触を覚える。これが何なのかはよく分からないが、良い物では無い事は確かだった。

「絶交してくれとでも言いたいのか？」

真琴はゆっくりと首を横に振った。

バサツと揺れる髪から、とてもいい匂いがした。

「あんたは、どう思う？ 男と女の友情って成り立つと思う？」

「ああ。俺は思ってるけどな……」

「そう……」

真琴はスプーンを、アイスクリームの中に突っ込み、立たせた。
そしてスプーンを持っていた手をそのまま髪の方に持って行った。

「あんたの好きな髪型は？」

「……ロングのストレート」

「じゃあ……」

俺はそう言われてハツとする。

そういえば、真琴はいつからなんだろう。どうしてなんだろう。
最初は、嫌がらせか、とまで思ったりもした。

「……どうしてだ？」

「そんなの決まってるじゃない。あんたに嫌われる為よ」

「……本気か？」

「ええ。もちろん」

よく分からないが、もう嫌われなくなつた。という事なのだろうか。

いや、そんな簡単に済むような事じゃ無い……か。

「じゃ、帰りましょっか」

真琴はいつの間にかパフェを食べ終えていて、ファミレスの出入口に向かって歩いていった。

その後ろ姿はとても綺麗で、俺はしばらく席に座つたまま見とれてしまっていた。

「男女の友情なんてのは成り立たないのよ……。か」

あいつは……。

「ほら、行くわよ!」

「あ、ああ。分かったよ」

俺は席を立ち、真琴のいるレジまで歩き出した。

真琴のストレートヘアーは、とても似合っていた。

EP5: 変わるもの、変わらないもの（後書き）

楓『おい、この二ヶ月間、何やってたんだ！』

.....。

真琴『どうせ遊んでたんでしょ？』

まあねっ。

楓『そっか、なら仕方ないな』

慎吾『だな』

この時期って、同窓会とかの集まりが多いんだよねえ.....。
ここ最近は全く作者ログインさえもしてなかったし.....。

真琴『まあ、遊ぶのはいいとして、あんたにはもう二つの連載作品があるのを忘れるんじゃないわよ』

はい.....。おっしゃる通り.....。すいません.....。

今の所はこの連載を終わらせる事しか考えていないので、二つの作品は、今の所後回しです。

カブけよカブけ。はりメイクしよっかな。とも考えてたり。

まあ、なんにせよ。

遅くなってしまう、申し訳ありませんでしたm
――
(
m

Ep6：不良生徒

後悔……。

後悔……。後悔……。後悔……。後悔……。後悔……。

後悔なんて意味無い……。

そんな事は俺でも分かる……。

でも……。

どうして……。

どうして……。

どうして……。

今更、遅い……。

それでも俺は……。

後悔せずにはいれなかった……。

繰り返し俺の心をえぐる悪夢……。その結末はいつも同じだった

……。

大切な人の死……。

俺は夢の中で何回あがいた……？

夢の結末が変わったところで、現実が変わる筈も……。……。

それでも、あがいて。そして、それは意味の無い行為だと気付いて……。……。

その繰り返しだった……。……。

俺は何回あがいた？

目を閉じれば、鮮明に蘇っていた顔も、今では、ぼやけてしまつて……。……。

俺は逃げようとしているのか……。……？

顔を忘れる事で、辛い現実から逃げようとしているのか……。……？

思い出、温もり、顔、匂い……。……。全て忘れてしまえば、俺は救われるのだろうか……。……。

俺は……。

救われなくてもいい……。

俺は忘れなくなかった……。

「おい神風、どこに行くんだ」

「トイレっす」

「おい、ちょっと待……！」

ピシャン。

教室を抜け出し、廊下でため息を一つ。

（真琴のおかげで、遅刻はしないで済んだんだけどな……）

誰もいない廊下。教師の声がいくつにも重なり、耳に入ってくる。

見慣れた光景。世界の静寂。

久々に味わうこの感覚。

授業を抜け出したのは、今年初めてだった。

あの日以来、小中高と、抜け出すのは決まってこの時期……。

違うのは、窓の外から見える景色が、去年のそれより低いこと、
あるいは違うこと……。

しかし、その違いを感じるのは一瞬のこと。

一度見てしまえば、後はその光景が当たり前の光景になる。

ただ、今年は――。

「そう言っただけだと、聞きましたわよ」

――もう一人の人間が廊下にいた。

「飛鳥か……」

階段に向かって歩く俺の後ろに、飛鳥がピッタリと付いて歩いてきた。

「お前もサボりだぞ」

「私は違います。あなたを連れ戻すと言って、先生の了承を得ましたわ」

「だったら俺も、トイレに行くと言って了承を得た」

俺は、こんな気分の時に、授業を受けていられる人間じゃなかった。

トイレと言って授業を抜け出し、廊下でため息をつき、あの場所へ行く。これが俺お得意のメニューだ。

時間や回数は特に決まっていない。気分次第で、このメニューを行うだけ。

「さすが不良生徒。言い訳も、おてのものなんですね」

「まあな」

俺は適当に応答する。

そんな俺に対し、飛鳥は少し顔を俯かし、何かを考えた後……。

「だったら、私はトイレの前で待ってます」

まじかよ……。

「あら、トイレの前で待っていて、何か問題ありますの?」

「いや……、問題は無いけど……」

「なら、よろしいですね?」

まじかよ……。

俺は考えた。

このままだとあの場所に行けない……。

どうやって飛鳥から逃げるか……。

そもそも飛鳥は、どうしてここまで付いてくるんだ……。

などと、あれやこれや考えているうちに、第一通過点である、階段まで歩いてきてしまっていた。

このまままっすぐ歩けば、俺が行くと教師に告げた、トイレ。しかし俺の目的はトイレに行く事じゃない……。

「そっちは階段ですよ」

……。

「俺、一階のトイレじゃないと落ち着かないんだよね」

ハハハ。と、愛想笑いを浮かべながら言う。
しかし、そんな俺に対して、飛鳥は冷めた目でじっと見つめてくる。

「とか言っつて、窓から逃げ出す気でしゅう？」

ばれた。

「図星のようですね」

図星だという事もばれた。

一気に言い詰め寄られる俺。
そもそもトイレに行くなど、小学生でも思い付くような言い訳。
少しでも問い詰められれば……。という事は、充分に予測できた。

ただ、今までその言い訳で抜け出せていたのは、誰も何も言っつて
こなかったから。

去年の学級委員は、かなり弱気な人だったし、小中学生の時は、
問い詰められたら、走って逃げていた。

しかし高校生にもなって、走って逃げるのは……。

階段とは垂直に、廊下と平行して向かい合う俺と飛鳥……。

よし、この手を使おう。

「あーっ！ 遅刻してた慎吾が来たぞーっ！」

俺は階段を指差し言った。

「えっ！？ 本当ですよっ！？」

バーカ。嘘に決まってるだろ。

と、心の中で飛鳥を嘲笑いながら、俺は逃げる体制を……。

「YO！ YO！ 僕は奇跡の男っ！ 僕に近付く帰省の女っ！
……これ、いいっ。すごくカッコイイっ」

ズコー……！！

「板垣さん、今、何時間目だと思っっていますの！？」

「げえっ。関羽！？」

何だよそのリアクションは……。しかも誰だよ、関羽って……。

そう言って飛鳥から逃げようとした慎吾の手を、彼女は強引に掴んだ。

そして――。

「さあ、教室に行きますわよ」

「うわあああゝ！ 資料室で寝ようと思ったのにいいゝ！」

そのまま引きずられて行ってしまった。

（嘘から出たまこと。ってのはあるんだなあ……）

そんなことをしみじみ感じながら、俺は階段を――。

「どこに行きますの？」

下りるのは止めて、教室に戻る事にした。

――それからの授業は、寝て過ごすように努めた。
寝ていれば何も考えずに済む。

とにかく今は、何も考えていたくなかった。

居眠りだったらおてのもの。俺は三、四時間目の授業の間、夢の世界へと旅立った。

チャイムの音で目が覚める。どうやら、昼飯の時間が訪れたようだ。

昼食を持っていなかった俺に、慎吾は、売店行こう。と言った。俺は少しためらってから、分かった。と言って立ち上がる。

「ぬおおー！！！」

「な、何よ!?」

俺が教室のドアに手をかけた瞬間、背後から酔っ払いが吐く声と、女子の声が聞こえた。これはおそらく真琴の声だろう。

「嘔吐と間違えられるなんて、僕の叫び声も捨てたもんじゃないっすねっ！！！」

「ああ、誇りに思え。で、どうした？ 鏡でも見たのか？」

「僕の顔は吐くほど気持ち悪いって言いたいんですかねっ！！！」

言いながら振り向くと、そこにいたのはやはり真琴だった。そして、慎吾は、その真琴を指差し驚いている。

「冗談だ。で、何を驚いてんだ？」

「真琴ちゃんの髪型が変わってる!？」

「なに、変えちゃ悪いわけ？」

慎吾は口で否定の意を伝える代わりに、首を思い切り左右に振り回した。

ブルンブルンブルン……。

ブルンブルンブルンブルブルブルブルブルブルブルブルブルブルブルブル……。

……ぴた。

「……止まんなよ！ そのまま首を一回転させろよ！」

「それ、遠回しに死ね、って言ってるでしょ!?!?!」

「遠回し……?」

「……次からはせめて、遠回しに言ってくださいませんか……?」

と、涙を流しながら言う、慎吾だった。

「で、楓。これから学食行くの？」

慎吾など最初から居なかったかのように、真琴が聞いてくる。

「……ああ。昼飯買わないといけないからな」

無難な返事しかできなかった。

真琴との間に、少し気まずい空気が流れていたせいでもあるし、真琴を直視できないせいでもある。

いつもと変わらない態度をとる真琴。そんな真琴と目を合わせられない俺。

俺の様子がいつもと違う事に、真琴は気付いているだろうか……。

「そつ、じゃあ今日は、別々に食べましょ」

真琴はそれだけを言い、踵を返し、同じ部活の友人の所に行ってしまった。

普段通りの、何の変哲も無い真琴の行動でさえ、逐一意識してしまふ。

ずっと今まで変わらなかった、真琴との関係が、変わってしまっそうで怖い。

『男女の友情なんてのは、成り立たないのよ』

…。
どうして真琴は、俺の嫌いなツインテールにしていたのだろう…

真琴は何を言っている？

何を俺に伝えようとしている？

俺達は幼なじみで、掛け替えの無い親友同士じゃないのか？

よくわからなくなってきた……。

「楓ーっ、学食行くぞー」

「あ、ああ。分かった」

とりあえず今は、腹を満たす事にした。

学食を利用する生徒は、ほとんどがスポーツ推薦で入学した生徒たち。普通に入学した生徒たちは、基本的に利用しないそうだ。

そのおかげでこの学校では、パン争奪という名の戦争は繰り広げられない。

戦わなくてもパンが食べれる嬉しさと、高校生定番の行事が無い寂しさと。なんだか複雑な気持ちだ。

アスリートを目指す生徒たちでこった返す、食堂内。

俺達はそこで適当にパンとジュースを買い、今日は噴水前で食べる事にした。

南の方から降り注ぐ陽光が、水の扇をキラキラと照らす。
噴水を囲む石垣に腰掛けようと、それに向かって一歩一歩、歩く。

「なあ、楓」

「ん？」

「真琴ちゃん、どうして髪型を変えたんだ？」

「……さあ。俺にはわからない」

俺と慎吾は石の椅子に腰を掛けた。

背中から、水同士がぶつかる音が、絶えず聞こえてくる。

「そう……。楓だったら、真琴ちゃんについてなら何でも分かる、
って訳じゃ無いんだな」

「まあな。俺達は異性だし、何か言いづらい事の二つや三つはある
だろ」

「ふっふーん？」

慎吾はニヤリと、気味の悪い笑みを浮かべてくる。

「つまり、楓も僕も、立ってる土俵は一緒って事だ？」

「はあ？」

「意味が分からないなら、分からないままでもいいさ。いよっしゃあー！ 俄然やる気が出てきたぜー！」

こいつに勝ち誇った顔をされると、無性に腹が立つ。
おまけに立ち上がってガッツポーズまでしてるし。

「いやあゝ。それにしても、真琴ちゃんのストレートヘアは最高だったなあゝ」

「お前、髪の毛を抜いてやりたい男子生徒ランキングで、他の追隨を許さなかったけどな」

「なんか、見るだけで心が洗われるって言うかさゝ」

「お前、心臓に毛が生えてそんな男子生徒ランキングで、予想通りの初代チャンピオンだったな」

「目の保養にもなるしねゝ」

「お前、目ん玉をくり抜きたい男子生徒ランキング、ブッチギリの優勝だったけどな」

「あんたさっきっから、いちいちうるさいんですけどっ！……！」

慎吾はプンス力怒りながら言ってくる。

「冗談だ。本気にするな」

「してないよ！　つか、そんなランキングがあったら、問題あるでしょ！」

「ただ、本当にあつたら、お前が優勝しそっただけだな」

「ふんっ、言ってる。そうやって楓がごちゃごちゃ言ってる間に、真琴ちゃんも貰っていくからな」

「はははっ。冗談は心臓の毛だけにしろよっ」

「んな物生えてないけどねっ！！！！」

こうやって流れていく、いつもの時間。変わらないもの。
このまま、時間が止まってしまえば……。もし世界が、変わらないままの世界なら……。

このモヤモヤは消えるだろうか……。

今が変わる。それがとても怖い。

変化を恐れ、安定を求める。

それは悪い事なのだろうか……。

「おい、楓。あれ、生徒会長じゃないか？　なんかこっち見て手を振ってるぞ？」

「……………？」

……そうか。変化が必ずしも悪い事ばかりとは限らないか。
望まずに起きた変化もあれば、その内容は全てが悪い事ばかりじゃ無い。

俺は三階の窓から手を振る時雨に、手を振り返した。

彼女の隣にはいつも通り、花音がそこにいた。

俺が手を振ると、時雨はニコツと笑ってから、窓の向こうに消えていった。

「おい……………」

隣からどす黒い、呼び声が聞こえてきた。

「楓えええー！！！！　いつの間に会長と仲良くなったんだああー！！！！」

んな事、忘れたよ……。

「くううう。うらやましい。紹介してくれよ、楓え」

「お前、真琴一筋じゃなかったのか？」

「くわああ。そうだったあ。でも、紹介してもらっただけだし、それだったら真琴ちゃんも許してくれるよな？ な？」

「許す許さない以前の問題だけだな」

「いや待てよ。もし楓が僕を会長に紹介したりしたら、僕の魅力にコロッとやられた会長が……」

（こいつはなんて幸せな人間なんだろう……。）

俺はパンと飲み物のゴミを持って立ち上がった。

「おい、教室に戻るぞ」

「……そうしたら、真琴ちゃんと会長で僕を取り合う喧嘩になったりして……。あ、もう行くの？」

一応声は、彼の耳に届いていたようだ。

「ああ。次は体育だからな」

「おつ、唯一楽しい授業じゃん！」

「だな。だからさっさと行くぞ」

「おっけー」

俺達の関係は変わらないよな？
俺は心の中で、そう問い掛けた。

E p 7 : 告白は廊下で

「真琴ちゃん」

特別教室が並ぶ二階。他の階とは違い、人っ子一人いない廊下を歩く真琴に、慎吾が話し掛けた。

俺は二人から二、三メートル離れ、その様子を伺う。

「ん、何の用、慎吾？ 下らない用事だったら喉に手え突っ込んで喉仏を声変わりする前の状態に戻すわよ？」

真琴……。あいつ、本当に女か？ 男でもあそこまで恐ろしい事言えないぞ……。

慎吾はニコニコ笑いながら殺気を放つ真琴から離れ、俺に近付いてくる。

そして真琴に背を向けたまま、彼女に聞こえない声でヒソヒソ言ってきた。

「なんか今日の真琴ちゃん、機嫌悪くない？」

「ああ。昨日親父が真琴の下着盗んだの、バレたんだ」

「あんたの親父さんビンビンっすね!!!」

「まあ親父、真琴のファンだからな。一応、一命は取り留めた」

「……死にかけたの？」

「全身打撲……」

「……告白は今度にしようかな……」

休み時間の廊下で、本気で告白する気だったのか……。本物の馬鹿を見た気がするぞ……。

ならばこの愉快的状況を逆に利用しない手は無かった。

「いや、慎吾。この状況を逆に利用するんだ」

「逆に利用する？　どういう事？」

「真琴は今、とても怒っているよな？」

「うん、誰も近寄れないくらい怒ってるよね」

「だったら、その怒りを自分に向けさせるんだ」

「無理無理……！　絶対に死ぬよ……！！」

「待て待て。人の話は最後まで聞け。真琴の怒りを自分に向けさせる……つまりな……」

『真琴ちゃん……』

『何よ慎吾。今、私機嫌悪いから話し掛けないでくれる？ 殴られたいなら話は別だけど？』

『……』

『分かったら話し掛けないで。じゃあね』

ここで、立ち去ろうと背を向けた真琴に抱き着くんだ。

『ちょっと！！！ 何すんのよ！！！』

ここでお前は一発殴られる。
しかしお前は立ち上がって、こう言うんだ。

『そんな怒りに任せたパンチじゃ、俺は倒せないぜ！！！』

『えっ！？』

『何に怒っているのかは知らないけどね、その怒りを全部僕にぶつけたらいいさ！ それで真琴ちゃんの気が晴れるなら本望だからねっ！』

ってな。

「そんな男気に真琴は惚れていくんだ」

「楓……」

慎吾は俯いたまま、体をふるふる震わせながら俺の名を呼んだ。
さすがに慎吾のような馬鹿でも、この計画のおかしさに気付……。

「お前天才だよっ！……」

……かないのがこいつだったな。

「よっしゃあ！…… 結婚式の司会はお前に任せるぜ！……」

「香典はいくらぐらい欲しい？」

「いくらでもいいぜ。お前にはお金より大事な物を与えられたんだから……。嫁という名のな掛け替えの無いパートナーをさ……」

こいつ、マジだっせえ……。

慎吾はニコニコ顔で、俺に背を向け、そのまま真琴と向き合った。

「で、用って何？ 下らない用事だったら、歯を全部抜くわよ？」

「……」

慎吾は無言だ。

「用は無いの、って聞いてるんだけど？」

「……」

「ちょっと、何か言いなさいよ」

「……もう、焦らさないで、早く立ち去ってよ真琴ちゃん」

……。

「今、何て……？」

「……うつんっ！ なんでもないっ！」

流石に失言と気付いたのだろう。慎吾は両手の手の平を真琴に向けて、違う、違うと振りながら言った。

「そう、じゃあ私は行くわよ」

言って真琴が背を向けた瞬間、慎吾が電光石火の如く、一気に間合いを詰めた。

慎吾のいた場所には未だに残像が残る。

そして真琴に抱き着――。

「ウラアアア――!!」

「ングヘアアア――!!」

――いた瞬間、真琴のストレートが見事に顎に炸裂ウウ――!!

K-1選手でも一発KOしてしまう程の威力があるパンチを浴びた慎吾。その勢いで、頭から地面にたたき付けられる。

常人なら生死に関わるパンチだが、何故か、余裕で生き残っている慎吾。

そこで一言。

「そ、そんな怒りに任せたパンチじゃ……、この僕は倒せないね……
……って! この発言はマズイよっ!――!!」

「あゝあゝ？」

成功する筈も無い上、死にかけたくせに、作戦を続行させようとする。

既に真琴の反応も『え！？』じゃなくて、『あゝあゝ？』なわけだが……。

「真琴ちゃんが、下着を盗まれて怒っているのかどうかは、分からないけどね、その怒りを全部僕にぶつけたらいいさ！それで真琴ちゃんの気が晴れるなら僕は本望だからねっ……………だからこの発言もおかしいって！！！」

余計なアドリブが入っちゃった。

「どうしてあんたが知ってんのよ…………？ まあいいわ。この怒りをぶつけさせてくれるならね」

「真琴様。本当に申し訳ありませんでした。どうか殴るのだけは……………」

もう慎吾に残された手段は、ただひたすら謝罪をする事以外に無かった。

「ハアツッ！！！」

「ギヤアアアアアーーーー！！！！！！！！！」

地獄を思わせる、慎吾の悲痛な叫び声が校内中に響き渡った。

香典は二、三万くらいにしとこうかな。

と一人ぼそつと言い、その場を後にした。

「楓えええ！！！！！」

・・・が、真琴が背後から大声を出しながらやってくる。
慎吾の体は十秒ともたなかったようだった。

「どうしてあいつに言ったのよ！」

「ん、何を？」

「何をつて……。えーつと……。だから……。その……。言わなくとも分かってんでしょっ！？」

「ああ、下着の事か」

「そうよっ！　どうして言ったのよっ！」

「うっせー！！！！　婦女子は黙っていやがれてんでい！！！！！」

「……殴つてもい……」

「……いや、慎吾が、どうして真琴は怒ってるの。みたいな事を言つたからさ」

よくは覚えていないが、同じような事を言つてたと思う。

つか、簡単に脅しにのせられる自分が嫌になる。

「まあいいじゃん。ストレス発散できただろ？」

「まあ……、確かにそうだけど……」

俺は真琴の背中越しにいる、慎吾の姿を見た。
そこには俯せになったままピクリとも動かずに、煙をプスプス出している彼がいた。

合唱。

「巡る巡る〜風え〜 巡る思いに〜のおってえ〜」

「……………気でもおかしくしたの？」

「……おい、真琴。普通は今ん所、ツッコミ入れてると思うぞ。合唱じゃなくて合掌やがなー！ ってさ」

「そうよね、ごめん。で、慎吾に言った罪は重いわよ?。」

左に受け流されたア!?

「……すみません」

「パフェね。ジャンボパフェ」

「……分かったよ。帰りにパフェおごるよ。元はと言えば親父のせいだし」

「なら許してあげる」

パフェを奢ると言った途端にニコニコ顔。なかなか現金なやつだ。

「おい! 今の音は何だ!」

と、慎吾の奥の方から聞き慣れた怒声が聞こえてくる。

コツッ。コツッ。

一歩。また一歩。足音が少しづつ近づいてくる。

そしてその声の主は、プスプスと煙を出しながら床に寝る慎吾を

ひょいと跨いだ。

「またお前か」

そいつはやはり、体育担当で、俺達の学年主任、増岡だった。
俺は返答する代わりに、そいつをじっと睨み付ける。真琴もまた、
その増岡を睨んでいた。

「稲瀬も、一緒に居る人間は考えた方がいいぞ？　こんなクズとは
すっぱり縁を切れ」

こんな奴を相手に憤っていても仕方が無い。
それにこいつは、俺が反応するのを待っているんだ。聞き流せ。
聞き流すんだ神風楓。聞き流すんだああ。俺はクズじゃ無いぞ
おお。

「稲瀬、お前が去年の生徒会長と別れたのも、こいつのせいだった
んじゃないか。こいつは周りの人間を不幸にする、ただのクズだ。
違うか、稲瀬？」

フッフ……。なかなか言ってくれる。

いくら温厚な俺でも、勘忍袋つてのがあるんだよ！　コンニャロ
！！！！

「おい、糞ジジイ！！！！ テメー……………」

俺が一步、増岡に詰め寄った刹那二の腕に手の感触がした。

「いくわよ」

「ん、真琴……………うわぁっ」

そのまま増岡から離れるようにして、グイッと引っ張られる。それにしても、女とは思えない、この握力は何だ。右手の先っぽから血の気がどんどん引いてくんですけど。

「私は楓と縁を切る気はありません」

「……………そうか。所詮お前もただの貧乏人って事か」

二の腕を掴む、真琴の手の力が更に強くなった。それは下手をすれば骨が砕けそうな程の。

二の腕から先の感覚は既に無い。二の腕から先を切断されたような感覚だ。

「……………声の主はそこで寝てます」

真琴は背中を向けたまま、ぶっきらぼうに言う。

真琴は一度も振り返らず、俺の腕を掴んだまま、足早にその場を立ち去った。

俺が真琴から開放されたのは、それから間もなくの事だった。

キンコーンカーンコーン

「おうわったああゝアハフウゝン」

放課後になった瞬間、俺は悩ましい声と共に脱力。

聖蘭のマリリンモンローよゝん。

……心の中でボケても、誰もツッコミを入れちゃくれない。

「おうっふうわったアハゝイヒヒヒヒゝ……ぶべらっ！……！」

背伸びをしながら脱力する慎吾が脱力しきる前に、俺は慎吾の両頬を思いきり挟むようにひっぱたいた。

「ちゃんとツッコめよ！ バカヤロー！」

ツツコミを入れない慎吾に、腹が立つただけだ。

「なあ、楓、これからどうするよ?」

慎吾は何事も無かったかのように、後ろを向いてくる。

本当に何事も無かったかのように言ってくるのだから、殴られるのがいかにも日常茶飯事か、という事がわかる。

「これからどうするか……、か。うーん……」

「楓ーっ、今日の部活は六時くらいに終わるんだけど、どこで待ち合わせする?」

と、俺が悩んでいる所に、真琴が意気揚々と来た。
そこで俺は真琴との約束を思い出した。

「ええっ!? 何、楓と真琴ちゃん、デートするの!?!」

「じゃあその時間までに学校に居なきゃいけないのか……。一度帰るのは面倒臭いな……」

「あんたが携帯持っていれば、便利なんだけどねえ」

「抜け駆けは卑怯だぞ！ 僕も誘えよ！」

「いや、べつに無くて困らないしなあ……」

「まあ今、その話はいいわ。とにかく、どこに集合する？」

「おい楓っ！ 僕の話聞いてるの……」

「「うっさいんだよ……！」」

うるさいと言われた慎吾は、すかさず泣き顔になる。

「何で僕を誘ってくないんだよ！ 僕達の友情って、そんなに薄っ……ぶべらっ……！」

慎吾が言い終わる前に、俺は慎吾の顔をブン殴った。

特に意味は無かった。

ただ腹が立つたから殴っただけだ。

「楓なんか大嫌いだああ……！！！」

慎吾は制服の袖を涙で濡らしながら、教室を飛び出していった。

「神風さん、今日は図書委員です……」

と不意に咲蘭が言う。

そついや、今日は図書委員会があつたな。

「あ、そついやそつだった。なら調度いいや。部活終わったら図書室に来いよ」

「そつ、わかつたわ。んじゃね」

俺が言つと、真琴は挨拶も早々に、まっすぐに伸ばした髪の毛をサラリと揺らし、廊下で待つ友人の元へと行つてしまった。

その友人はこの前俺から逃げた二人だった。

真琴の背中を見送ってから、俺も自分の鞆を持ち、たいして長くない髪をサラリと揺らしながら、立ち上がる。

「んじゃ、行くか」

「……はい」

図書室と言うよりは、図書館と言つべき聖蘭学園の図書室。二階にわたって様々なジャンルの本が置いてあるそこは、言わば本の宝石箱や！。

しかしこの市民図書館規模の大きさも、俺にとっては何の意味も無い。

俺はあまり本を読む人間じゃなかった。親父は常々、本を読むのはいいぞ。と言うが、俺はどうも乗り気になれないままにいる。

興味が無いのに本を読もうとしたって、どうせ三日坊主で終わるに決まってる。

なんて事を思いながらその図書室に入る俺。後ろには咲蘭。

俺達は図書室に入った瞬間、ため息を漏らした。

「今日は大変そうだな……」

「そうですね」

室内は生徒たちでごった返し。
おまけに返却カウンターの前には、十人近い数の行列ができていた。

「しかし、本当にでかいよな……」

午後五時半過ぎ。

俺達二人は全ての仕事を終え、俺は室内にあるフカフカのソファに、咲蘭はカウンターに座っていた。

「見つからない本は無い。って言われるくらいですからね」

「え、それマジか!？」

「いえ、さすがにそれは無いです。それほど、ここには沢山の本がある。という事です」

「そっか……。そうだよな……」

もうこの時間に図書室へ来る生徒などいる筈も無いが、だからと言って俺達が帰る訳にはいかない。

ここがゲーセンだったらいいのだが、ここは図書室。暇を潰す手段は、会話をする事くらいしか無かった。

が、会話相手が本を読んでいるせいで、なかなか会話らしい会話ができないでいる。

「静かだな」

「ええ」

「二人きりだな」

「ええ」

「咲蘭って可愛いな」

「ええ」

「おつ。言うねえ、咲蘭ちゃん」

「ええ」

……………。

「フヒヒヒ……。姉ちゃん、いい体してんじゃねーか」

「そうですか……」

それまでとは少し違った反応が返ってくる。

一応は俺の言葉を聞いていたんだろうか……。

と思ったのもつかの間。咲蘭は本に向けていた視線を、それから外した。

「神風さん、一つ聞いてもいいですか？」

「ん？ どした？」

言って咲蘭は俺を見る。

二人の視線がぶつかった。

咲蘭はいつものように、他人をよせつけないような、冷たい眼差しだった。

「何故殴ったのですか？」

何故殴ったのですか……、か。

「を和式便所って言ったから？」

「板垣さんを殴った理由は聞いてません」

確かに横に倒せば和式便所に見えなくもない。

ただ、ベートーベンが譜に和式便所を書き込むかって話だよ。

「ああ、そうなのか。じゃあ誰の話だ？」

「……生徒会長です」

ん……、咲蘭も意外と立ち入った話をしてくるもんだ。

咲蘭にはかなりの洞察力がある。

俺はなるべく表情を変えないよう努めた。

「特に意味は無い。気に入らないから殴っただけだ」

「下手くそですね。嘘つくの」

「……じゃあ逆に聞くが、それを知ってどうする？」

俺は少し苛々した口調で咲蘭に聞いた。

特にいらついている訳じゃ無い。

あまり聞かれたく無いから、自然とこういう口調になってしまうのだ。

「……確かにそうですね。すみません……」

「ん、いや。謝る程の事じゃ無いだろ」

と、一応取り繕っておく。

咲蘭はそれを聞き、再び視線を本に戻した。

ペラっとページをめくる。

視線が上から下へ。一番下へ行ったら上に移し、そしてまた下へ。そこでふと気になった。

本に向ける視線が、俺に向けていたそれより、優しかった事に。

「そんなに面白い本なのか？」

「……いえ。取り立てては……」

「ふーん。じゃあなんでそんな目をしながら見てんだ？」

「そんな目……？」

「……いや、何でもない」

本人は特に意識していない様子だった。

俺の言った、咲蘭の『そんな目』。

それは俺が友人に向けるような……、そんな視線だった。
咲蘭の言った『そんな目』。

彼女が本に向けていた視線。それは俺が普段、友人に向けている
ような……、そんな視線だった。

対照的に、咲蘭が俺に向ける視線は、言わば俺が本に向けるよう
な……。そんな感じの視線。

それはやっぱり、咲蘭にとって、俺は本以下って事か……。

「なあ、咲蘭」

「……はい？」

「本……、好きか？」

「はい」

「俺よりも好きか？」

「………はい」

好きなのか……。

プチショック……。

本以下と言われ、少し心が折れた俺は話題を変える事にした。

「あー、なんだ。そのな……。いつも思ってたんだけどな、咲蘭は
どうして敬語を使ってた？」

「………」

俺の質問は聞こえていたはずだ。

なのに咲蘭は、本を見たまま何も言わない。

俺は聞いていると仮定して、話を続ける。

「咲蘭は友達にも敬語使ってたのか？」

それを聞いた咲蘭は、目をしかめた。

しかし、少し反応はしたものの、咲蘭は相も変わらずに本に視線を向けている。

そして咲蘭はページをめくった。

「友達なんていませんけど……？」

少女は常に一人で過ごしていた。

先生に対しても、同級生に対しても、それが同性だとしても、少女は敬語を使う。

「何でだ……？」

「……………」

咲蘭は再び黙りこくって、本を読み進める。

つい勢いで聞いてしまった事に、後悔する。

俺の質問は、ただ場の空気を重くしただけだった。

「……………デリカシーの無い事を言いちゃったな。すまん」

「……………いえ」

……………まっ、そりゃそっか。

咲蘭みたいに、友人を作らない人ってのも居る訳だし。

ペラッ。

ページをめくる音。

本を読む咲蘭を見ると、彼女との距離の遠さを、ひしひしと感じさせられる。

真琴と話す時みたいに、彼女と話せば、どれだけ面白いのだろう。

このお坊ちゃま学園で見つけた、数少ない友人の一人。

俺は咲蘭の事をそう思っていただけに、さっきの言葉が、俺の脳内をえぐった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1919d/>

W A N T E D !

2010年10月12日07時14分発行